
大東亜日中大戦

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大東亜日中大戦

【Nコード】

N4751I

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

世界的な不況がようやく収束に向かうなか、アジアは緊迫の度合いを深めていた。中国は人民の内政への不満をそらすため、態度を硬化させ軍国主義をひた走る。周辺諸国もそれに倣い、東アジアは軍拡競争の時代を迎えた。同じ頃、日本では新たに結党された保守政党『敷島新党』が、衆参両院で過半数の議席を獲得、国民の圧倒的な支持を背景に、自国の権益を守るべく、独自国防力強化を開始することとなった。

プロローグ（前書き）

今回が私の初作品です。文章は拙いかもかもしれませんが、最後まで作中の日本の行く末を見守って頂ければ幸いです。

ブローグ

平成二五年一月五日

東京

国会議事堂の内部に、高らかな声が響いた。

「賛成二五七票、反対一二六票。よって、憲法九条廃止法案を、可決します！」

議場は拍手と怒号に包まれた。野党が「軍国主義だ！」「無効だ、無効にしろ！」と叫ぶが、この法案を押し通した藤井武雄首相は、拍手を続けていた。

野党がどれだけ騒ごうと、藤井の率いる内閣と敷島新党は、国民の圧倒的な支持を受けている。今回の法案可決もその結果であり、いまさらどうにもならない。

この可決直後、各新聞社は号外を出した。その内容はほぼ同じ、憲法九条の廃止を伝えるものだった。

そして国民はすべて、この結果に驚いた。

確かに、これまでの弱腰外交を捨て、強硬な態度を貫く藤井内閣と敷島新党は頼りがいがあり、国民の大多数が支持していた。

しかし、まさかここまでエスカレートするとは……。

もはや予想外の一言では済まされない。あるいは、日本は再び戦火に包まれるかもしれない。

だがそれはすべてこの内閣を支持した、国民の責任である。そして、多くの国民はまだ、この時点では楽観視していた。

第一話 国防省創設

二月二日 東京

平成二五年の建国記念日に、新たな省が産声を上げた。その表札にはこう書かれていた。『国防省』と。

国防省。国家の要でありながら、長らく日本には存在しなかった省が、ようやく誕生したのだ。

これまでは防衛庁、防衛省なる省庁が代役をこなしていたが、やはりそれにも限度はあった。海外の国防省はほとんどが、現役、予備役、退役のいずれかに含まれる軍人で構成されるのに対し、日本の防衛庁、防衛省は官僚が支配していた。官僚は総じて軍事に疎く、仕事が遅い。現場から大臣への報告に、一週間もかけることもままあった。これではいざという時、勝てる戦いにも勝てない。

だが、ようやく転機が訪れた。それが敷島新党の政権獲得と憲法九条の廃止である。国防のための戦力保持が、法的に認められたのだ。

ならば遠慮することは無い。

まずは防衛省の廃止と国防省の創設。自衛隊はその籍を国防省に遷し、名称を国防軍に改めた。

防衛関係費改め国防費も増額された。世界的に国防費は右肩上がりなので、不思議はない。むしろ、これまでの下がる一方の防衛費が異常だったのだ。

その他、国防省の創設によって多くの変化があった。部隊の編成や装備調達の計画から階級の名称までその幅は広い。

夜、国防省では各国の駐在武官を招き、創設記念パーティーが開催された。

主宰はもちろん国防軍の最高指揮官、藤井である。パーティーなど、必要ないと言えは必要ない。実際、国防省では

様々な仕事が山積している。

だがこのパーティーは、日本の国防力強化を各国に伝えることが目的なのだ。

藤井も積極的に国防省をアピールした。

まず唯一正式な同盟国であるアメリカの武官と、挨拶を交わす。

ロシアの武官を見つけると、そちらにも話しかけた。

ロシアの駐在武官アントン・P・ネクルテンコ陸軍大佐は、会場内で一番体格が良いかもしれない。藤井も日本人の中では体格が良い方だが、ネクルテンコ大佐には遠く及ばない。

「お久しぶりです、ネクルテンコ大佐。我が国も、ようやく国防省を持てましたよ」

あいにく、互いに相手の母国語は分からないので、会話は共通語の英語であった。藤井の英語は少々訛があるが、問題にならない程度である。ネクルテンコ大佐もすぐに挨拶を返した。

「お久しぶりです藤井首相。日本軍が正式に編成されたなら、世界中が喜びますよ。喜ばしい限りです」

ネクルテンコ大佐は、暗にPKO、PKFへの積極的な参加を求めているのかもしれない。

これまで自衛隊では様々な制約があったが、日本軍となれば話は別だ。PKOのみならず、PKFへの参加もあり得る。

国連の常任理事国であるロシアからすれば、その分負担が減ることになる。

「そうですね。まだ世界中で紛争が続いています。しかしこれから我が国も、国際平和の役に立てるでしょう。」

藤井は一旦言葉を区切ると、笑顔をやめ真顔になった。

「そう言えば、日本やロシアにも早急に解決しなければならない、領土問題がありましたね？」

言うまでもなく、藤井は北方領土のことを意識していた。ネクルテンコ大佐もそのことは察しているだろうが、巧みにかわす。

「確かに我がロシアは、チエチエン共和国のことで頭を痛めています。そちらも尖閣諸島や竹島で難渋していきましょう」

ネクルテンコ大佐の言うとおり、実際に日本が抱える領土問題は北方領土だけではない。

藤井は苦い顔をした。これまでの政権は領土問題に真剣に取り組んでいなかったので、周辺諸国はやりたい放題だったのだ。

表情を笑顔に戻した藤井は、ネクルテンコ大佐に言った。

「確かに我が国は領土問題に困っています。しかし、今は戦争という手段もあります。大いに進展がありましょう」

ネクルテンコ大佐は一瞬、顔をこわばらせた。藤井が何を言いたいのか、分かっているからだ。

中国、韓国に対する武力行使があり得るなら、ロシアに行く可能性もあるのだ。

ネクルテンコ大佐個人としては、日本とは戦いたくない。

ロシアはこれまで、日本には散々煮え湯を飲まされてきた。

日露戦争では海軍は壊滅し、満州を追い出されたし、ノモハンでは陸空軍が大損害を受けた。第二次世界大戦では、不意を突いたため勝利したが、占守島や虎頭要塞など局地戦では苦戦を強いられ、冷戦中も自衛隊が極東艦隊の太平洋進出を防ぎ、ソヴィエトはアメリカに遅れをとった。

ロシアにとって日本は天敵なのだ。しかも戦後の急成長で、化け物のように育ってしてしまった。

その日本と戦って勝てる自信など、ネクルテンコ大佐は持てなかった。

「戦争は勘弁していただきたいですね。アジアの戦火が飛び火しては、たまりません」　ネクルテンコ大佐の言葉に、藤井も笑いながら答える。

「分かっていますよ。もちろんできる限り交渉で解決するつもりです。ですが武力行使の可能性があるかないかでは、重みが全く違いますからね」

「なるほど……」

ネクルテンコ大佐は思った。この首相は戦争を始めるつもりだ。

二月二日 東京

いつもと同じ朝がやってきた。

しかし、東京の市ヶ谷は異様な雰囲気だった。

一昨日まで防衛省だったビルの正門に入っていくのは、背広姿の官僚ではない。半分は明らかに軍人と思われる身なりなのだ。そして残り半分もほとんどが、背広姿だが軍人のような物腰であった。彼等は、現役、あるいは退役軍人だった。国防省創設によつて、官僚が軍事に関わる大幅に減らされ、代わりに軍事の専門家が入った。

一部の人間は「軍国化だ!」「文民統制の崩壊だ!」と騒ぎ立てたが、実際にはようやく他国と並んだだけである。

もちろん、文民統制も崩壊していない。文民とは官僚ではなく、国民でありその代表の政治家なのだ。最高指揮官の藤井は文民であるから、問題は全く無い。

この一部の人間は指摘は、そもそも間違つた知識に寄るものであり、時間の経過とともに自然に立ち消えとなった。

第二話 進水式

四月一九日 横浜

アイ・エイチ・アイ マリンユナイテッドは、海上自衛隊の護衛艦の建造を手掛ける企業である。戦前は小型艦艇の建造が中心だったが、最近では『ひゅうが』『いせ』といった、一万トンクラスの護衛艦も建造している。今日進水を迎えた新造艦も、その一隻である。

ヘリ搭載護衛艦改めヘリ空母『やましろ』は、予算調達後急ピッチで建造された、『ひゅうが』型三番艦である。藤井が来年一月中旬までの戦力化を命じたため、造船所職員は残業と休日出勤が続き、まさに月月火水木金金の状態だったが、その甲斐あって起工から進水まで十一ヶ月で完了した。振り返れば、一番艦『ひゅうが』二番艦『いせ』はともに起工から進水まで、一五ヶ月かかったのだから、四ヶ月も短縮に成功した事になる。これまでの経験と、職員の努力の賜物である。

だが、まだ進水だった。一月中旬までの戦力化には、七ヶ月程度で艤装を完了しなければならない。

不可能である。

少なくとも、『ひゅうが』『いせ』の例を見る限り、七ヶ月は不可能な数字である。

進水式に立ち会った国防相の川村利彦は、『やましろ』を見つめながら、計算していた。

（まったく、首相も無茶を言う……。来年一月中旬など、できる訳がない。強行すれば死人が出た挙げ句、できた艦は欠陥品なんてことになるぞ）

川村は海上自衛隊出身である。閣僚の中では随一の海軍通だが、藤井の命令は無茶としか言いようがない。そして、なぜ藤井が一月中旬にこだわるのか、理由が分からない。

東京に戻ったら、予定の変更を申し入れよう。

川村が考えている間にも、進水式は進んでいく。

ドック内に海水が注がれ、『やましる』と名付けられた巨体が、浮かび上がる。成功である。

ロープが解かれ雇船が開かれると、タグボートが近づき、ドックの外に引き出される。

進水式は呆気なく終了した。この後、午後からはすぐに艤装作業が待っている。工期短縮のためには、一秒でも惜しいのだ。

一方、進水式が終わり用の無くなった川村は、すぐに東京に帰り首相官邸に向かった。

首相官邸で藤井に会った川村は、早速考えていたことを口にした。「首相、『やましる』の艤装は来年まで掛かる見込みです。一月中旬の戦力化は、おそらく不可能です」

川村の言葉を聞いた藤井は、短く尋ねた。

「無理か？」

「無理です」

川村の答えに、藤井は表情を変える訳でもなく、小さく呟く。

「そうか……。二月の戦いは戦力不足になるか……」

「は？」

この呟きの意味は、川村には分からなかった。一体、どこで戦うというのか。

「いや、何でもない。聞かなかったことにしてくれ」

藤井は声に出していたことに気づき、慌てて言った。

呟きの意味に川村が気づいたのは、官邸を後にし、国防省に向かう途中のことだった。

「まさか首相は……！」

川村は、身震いした。もし自分の考えが正しいのなら、日本はとんでもない方向に向かっているのではないか。

もうすぐ、七〇年振りの戦争が始まるかもしれない。それも、相

手は開国以来戦い続けてきた、宿敵だろう。

果たして勝てるだろうか。自信は無い。

ただの早とちりであって欲しい。

川村は心の底から願った。願うしかなかった。

第三話 “核”の意義

八月一日 東京

藤井は、電撃来日を果たしたギプソン・D・クレイリー米大統領と会談をした。

「もうすぐヒロシマの平和式典だが、大丈夫かね」

クレイリーが切り出した。現在藤井の政策を、一部の自称平和主義者が、先軍政治だと批判しているのだ。今のところは問題がない程度だが、かと言って無視できるものではない。

「問題ないでしょう。騒いでいるのはごく一部の無知な連中です。式典ではしっかり“平和のメッセージ”を伝えるつもりです」

「それで大人しくなれば良いが……」

今度は藤井が話を切り出す。

「ヒロシマと言えば、核廃絶は難航していますね」 五年前、アメリカ初の黒人大統領は、全世界核廃絶を呼び掛けた。世界中が熱狂したが、実際のところ進んで核兵器を放棄する国はいなかった。当然と言えば当然である。

“核”には、大きな力がある。核ミサイル一発持てば、アメリカすら、容易に手出しできなくなるのだ。その力を自分だけが進んで捨てる訳にはいかない。

結局、その大統領は任期中に核廃絶を達成できず、大統領の座をクレイリーに譲った。クレイリーは廃絶運動を続けていたが、個人的に達成できる気がしない。

「ああ、大変だよ。とうとう君と日本も、反対派に回ってしまったし……」

藤井は核廃絶に反対であった。核は日本に必要なのだ。もしアメリカの核がなくなれば、中国が本格的に日本を侵略するかもしれない。日本の平和は、アメリカの核兵器によるのも大きいのだ。

クレイリーはアメリカの存在が、廃絶の障害なのではないかと思

うことがある。アメリカに軍事力が集中しているのが、他国の核兵器の放棄を躊躇わせるのではないか。

クレイリーは極東の友人に洩らした。

「世界はまだパクス・アメカーナを疑っているのではないか？」

対テロ戦争の思わぬ苦戦と世界恐慌により、パクス・アメカーナは崩壊したかに見えた。だが実際にはアメリカの覇権は、思いのほか盤石であった。

アメリカの求心力が低下した後、世界が新たな秩序を求めるなかで、その下地と国力はいまだに大きすぎる存在だった。

核兵器がなくなれば、アメリカに敵う国はない。

新時代の覇者たらしめる国は、核兵器がなくなること、再びアメリカが世界を牛耳ることを恐れた。

クレイリーはそう考えている。

藤井にしてみても似たような考えであるが、彼は核兵器の定義が曖昧すぎるのも、大きな問題だと考えていた。

核弾頭は当然だが、他にはなにが核兵器なのか、はっきりしていない。例えば原子力艦は核兵器に入るのか？ などだ。極端な考えなら、原子力発電所だって、核兵器である。軍事施設は莫大な電気を使う。自家発電にも限度はある。原発は電気を生む便利な手段であり、また、敵国の原子炉を破壊すれば、広範囲に甚大な被害を与えることができる。さらに考えるなら、燃料の放射性物質を、核弾頭の材料に利用することもできる。燃料として搬入、貯蔵して、いざという時に転用すればいいのだ。

考えれば考えるほど、核兵器の定義は曖昧になる。

人類に野心があり、環境問題が取り沙汰されている間は、核廃絶など夢物語なのではないか。核があるからこそ、今の平和が成り立っているのだ。

核兵器が欲しい。藤井も、何度も思ったことがある。核保有国が仮想敵である以上、対抗上日本も国防のために核保有するべきなのだ。

何も、実際に使用する必要はない。極東においてインド、パキスタンの関係を再現できれば良い。カシミール地方を巡り、紛争を繰り返していた両国が互いに核武装をすることで、あの地域に一応の平和が訪れたではないか。日中間で同じことをすれば良い。

あえて言うなら、核とは平和のためのツールにもなるのだ。使い方次第で、人類を幸福にも不幸にもする。現在は核が平和を保っているのだから、核廃絶とはナンセンスと言える。

「まあ、核が平和をもたらすなら廃絶などしない方が良く、世界を破滅させるなら廃絶させるべきでしょう」

藤井は結論を出した。結論そう言うことなのだ。

「そうだな。だがそれは結論ではない気もするが……」 このクレイリーの答えに藤井はさらに言う。

「それを言うなら、おそらく人類は滅亡の時まで、本当の答えを出せないでしょう。核技術で滅べば廃絶させるべきだった。それ以外で滅べば残して正解だった。そういうことです」

「……君は案外、無責任なんだな」

クレイリーは苦笑いした。藤井の言葉はつまり、自分では最終的な結論を出さないということである。

「私は核廃絶など、はっきり言ってどうでも良いので。八月はそれよりも、差し迫った問題が多いのです」

そういえば、毎年八月一五日は中国が日本の首相を監視する日だった。藤井の政策からして、今年は特にひどそうだ。藤井は絶対、ヤスクニに参拝するからである。

「あまり騒ぎを大きくしないでくれよ。周りも迷惑だからな」

一応、クレイリーは忠告したが、藤井はただ、「善処します」とだけ答えた。

第三話 “核”の意義（後書き）

自分としても、果たして何が書きたかったのか……。
これからのために核兵器の定義をはっきりさせたかったのですが、
支離滅裂の感が……。

第四話 靖国（前書き）

ようやく中国登場です。

ただし開戦はまだだいぶ先ですが……。

第四話 靖国

八月一五日 東京

桜といえば日本を代表する花である。そんな桜の名所九段にあるのが、国家に命を捧げた英霊が祭られている靖国神社であった。

戊辰戦争後東京招魂社として始まり、以来、二四六万六五三二柱の英霊が祭られるそこは、まさに聖域。境内には独特の荘厳な雰囲気漂っていた。

藤井は毎年、靖国神社に通っている。去年の参拝は波紋を呼んだが、だからと言って今年は参拝しないなど、あり得なかった。

早朝の清々しい空気も、境内を明るく照らす朝日も、藤井には先人たちの放つ、護国破邪の気のように思えた。

清らかで荘厳な空気の中を、藤井と閣僚、彼らを守るSPたちは進んだ。午前九時、大太鼓が鳴り響いた。朝拝の時刻である。拝殿で大祓詞を唱え、英霊に拝礼する。

閣僚たち、特に首相の藤井と国防相の川村は、あらためて日本を守り抜くことを、多くの英霊に誓った。

そして、いつも通り参拝した藤井たちに、いつも通り難癖をつける国が二力国あった。言うまでもなく、中国と韓国である。

両国は常々、再軍備を進める藤井を日帝復活の象徴としており、この参拝は大きく報じられた。

参拝の当日には早くも両国のテレビで取り上げられ、特に中国の批判は凄まじく、再軍備の様子まで取り上げられていた。それによると、「日本はすでに空母二隻を就役させ、さらに一隻が艤装中であり、これは明らかに侵略の準備である。この状況で日本の首相が日本帝国主義の象徴たる靖国神社に参拝するとは、事実上の宣戦布告である」と言うのだ。

内閣府直属諜報機関の『戦略情報局』、通称SIBが入手したニュース映像を見て、藤井はその巧みな報道に、逆に感心した。日本

の報道陣では、これほど巧みな報道はできないだろう。

ニュース映像を進めると、第二次上海事変の空母『加賀』の記録写真や、果ては真珠湾奇襲攻撃まで引き合いに出し、日本が空母を保有することがいかに危険かを、熱心に説いていた。

中国の言う三隻の空母とは『ひゅうが』『いせ』そして『やましろ』である。なるほど、確かに三隻とも外観は素人からみれば、空母そのものだろう。日本国内でも騒がれたことは、記憶に新しい。

中国、韓国は盛んに謝罪と反省を求めており、国内の自称平和主義者もそれに呼応し、藤井批判を繰り返していた。

そして、翌一六日、ついに藤井は緊急の記者会見を開くこととなった。

中韓の謝罪要求と、その後の緊急記者会見。誰もが謝罪会見だと思っていた。

超鷹派首相もここまでか……。参加した記者は皆、口には出さないがそう考えていた。

やがて、予定時刻になり、藤井が姿を現した。フラッシュが焚かれるなか、藤井はマイクが設置された机の前に立ち、一礼の後、静かに座る。

直後の藤井の言葉は、記者たちを卒倒させた。

「私は、日本国民の代表として、中華人民共和国政府及び大韓民国政府に対し、強く謝罪を求めます！」

一瞬、すべての動きが止まった。誰もが、藤井の言葉の意味を理解するために、必死で頭を働かせた。

一通り反応を確認した後、藤井は続けて言う。

「一国の為政者の動向に対し、他国の政府が圧力を掛けることは、明らかな内政干渉であり、我が国に対し謝罪を求めるのなら、中韓両国が先に謝罪を行うべきです。特に中国政府に関して言えば、日中平和友好条約に定められた、「相互内政不可侵」に対し違反しています！」

さらに藤井は続けた。

そもそも中国の条約違反は今に始まったことではなく、歴史教科書の表記に対する横槍も内政干渉であり、過去の戦争の賠償請求も、「戦争賠償請求権放棄」に対する違反である。また、度重なる領海、領空侵犯は「主権、領土の相互尊重」と、日中共同声明による「日中間の全ての紛争について平和的に解決し武力又は武力に依る威嚇に訴えない」と言う条項に違反している。近年の異常なまでの軍備拡張も、共同声明の「日中両国は太平洋地域に於いて覇権を求めない。覇権を確立しようとする他の如何なる国や集団に反対する」と言う条項に違反している。

藤井はさらにこう付け加えた。

「日本の再軍備は中国の過剰な軍拡に対抗するものであり、中国が軍縮を行うのなら、それに応じる準備があります。また、日米の同盟もアジアの安定を確保するための物であり、条項には違反していません」

最後に、藤井はこう言った。

「日中平和友好条約はれっきとした国際法であり、日中両国にはこれを遵守する義務があります。もし違反に対する謝罪に応じないのなら、国際司法裁判で争う準備があります！」

中国共産党の魯民嘉主席は、非常に機嫌が悪かった。

先日、日帝に対して行った靖国批判が、不発に終わったのだ。それどころか、日本側は内政干渉だと主張、中国側の条約違反を批判し、国際裁判に掛けるとまで言い出した。

困ったことに、日本側の首相藤井武雄の主張はすべて事実なので、裁判に掛けられれば中国側が圧倒的に不利なのだ。

そして、魯を困らせることが、もう一つ国内にあった。若者の暴動である。

国内に日本が反省していないことを報道したところ、若者を中心に暴動が発生した。彼らは日本製品を叩き壊し、領事館を襲い、日

章旗を燃やしている。いまだに収拾は着いていない。

これらの暴動は、日本の手でリアルタイムで世界中に配信されており、すぐに暴力を振るう中国人民の醜態と、事態の鎮静化に努力しない中国政府の様子を、全世界に輸出していた。もちろん藤井の指示と、SIBの仕業である。

そして魯を悩ませるのは暴徒化した若者は、反省どころか自らの行為が全世界に流れているということを、まったく知らないことだった。

いまさら慌てて日本に謝罪すれば、人民の怒りの矛先は中国政府に変わるだろう。謝罪など、できる訳がない。

さりとて、国際裁判になれば中国側に勝ち目はほとんど無い。

「日本鬼子め、絶対に許さんぞ！ 必ず根絶やしにしてやる、覚悟しておけ！！」

魯の執務室に叫び声が響いた。

第五話 開戦準備

一〇月六日 東京

川村は首相官邸に呼び出された。

先月の騒動以来、日中関係が冷え込んでいる。この状況で国防相が呼ばれるなど、何があるのか多少鈍い人間でも、容易に予想できる。

（果たして、どちらと戦うのか）

川村は相手国を二力国に絞っていた。

首相の執務室のドアをノックすると、すぐに藤井が返事をする。

川村が入室すると、中にいたのは藤井だけではなかった。

財務相の岩田耕三、外務相の高階春樹、SIB局長の井上義人の三人が、藤井とともに川村を迎えた。

「よく来てくれた。早速だが本題に入る」

藤井は話し始める。

「八月に中国と一悶着あったが、睨み合いが続いている」川村は頷く。日本の主張に中国は沈黙を続け、事態は平行線をたどっていた。

「高階君と井上君が中国に対し、武力行使の可能性を示唆したが、動きはない。奴らは我が国防軍を嘗めて掛かっている」

これは川村も承知の事実である。中国はこれまで弱腰だった日本が、本気で戦いを挑むはずがないと考えているようだ。それどころか、日本国民や他の周辺諸国も、国防軍を自衛隊の名前が変わっただけだと捉えている。将兵も自信を喪失し始めてる。

「そこで、だ……」

藤井の顔が、一段と真剣になる。

「一度、国防軍に実戦を経験させたいと思う。現時点で中国と戦う気はないが、別の国と戦い、日本が弱腰ではないことを見せつけたい。相手国だが……」

「ロシアですね？ 開戦日は来年二月七日、戦場は北方領土、目的は国土奪回でよろしいでしょうか？」

川村は言葉を継いだ。四月からすでに感じていたのだ。

藤井は驚いた。川村が相手国はもちろん、考えていた開戦日すら当てて見せたのだ。

「そうだが……。なぜ分かったのだ？」

藤井の質問に、川村は得意そうに答えた。

「ロシアとの開戦に気づいたのは、今年の四月です。宣伝が好きな首相の性格からして、開戦日は北方領土の日、すなわち二月七日ではないかと」

あの時の藤井の呟きで気づいたのだろう。

「なるほど、大した洞察力だ。君の言うことは、だいたい正解だよ」
日本で北方領土の日と定められた二月七日に、北方領土を奪還するために戦いを挑む。成功すれば、恰好の宣伝材料になるだろう。

だが、川村の予測のなかで、一つ間違っているものがあつた。

「一つ違うのは、領土奪回が目的ではないということだ」

藤井は告げた。作戦目的の認識が違えば、支障をきたす恐れがある。

「はつきり言うが、私はいまさら北方領土など、どうでも良い。今度の戦いの目的はロシアを相手に勝利し、国防軍将兵と国民に自信と誇りを取り戻してもらふことだ。それに、外交問題を武力解決する覚悟を見せれば、中国も態度を改めるかもしれない」

だが今回の作戦は、その中国が問題だった。ロシアと戦っている間に、背後を突かれる可能性があるのだ。

川村はそのことを指摘した。

「ああ、分かっている。だからこそ『やましろ』の就役を急がせたが、間に合いそうにない。これは荒技が必要だろう」 藤井はいたって冷静に答え、ある提案をした。『やましろ』が間に合わないと分かったときから、対策を考えていたのだろう。

その提案を聞き、川村はもちろん岩田と井上も、驚きの声を上げ

た。

だが、やろうと思ってできないことではない。川村はむしろ、乗り気である。

「確かに荒技ですが、成功すれば我が国に隙はなくなります。早速、海軍とアイ・エイチ・アイに問い合わせてみましょう」

藤井は頷く。

「よろしく頼む。岩田君は戦費の捻出を、井上君はさらなる情報収集を、それぞれ頼みたい。それと……」

藤井は川村に向き直る。

「国防省に、戦術研究を頼みたい」

藤井の依頼に、川村が答える。

「承知しています。実はすでに研究を始めています」

実は四月に藤井の考えを察した時点で、川村は対露戦略及び戦術の研究を、各部署に命じていた。

「そうか、手回しが良いな。新しい情報が入り次第伝える。三人とも、よろしく頼むぞ」

藤井の計画が動き出した。藤井以外の誰も全容を知らない、壮大な計画が始まったのだ。

第六話 北へ（前書き）

またしても、いきなり四ヶ月も飛びます。

第六話 北へ

平成二六年二月五日 太平洋上

北海道の沖合を、物騒な船が集団で航行していた。

一目で軍艦と分かるそれらは全て、朝日をモチーフにした旗を靡かせている。日本海軍の所属を示す、旭日旗である。

四隻のフラットトップの大型艦を中心に、周りを多数の駆逐艦やフリゲート艦が囲う、典型的な輪形陣を組んでいた。

中央の四隻のうち二隻、『日向』『伊勢』はヘリコプターを、『大隅』『国東』は車輛を、それぞれ甲板上に並べていた。

この背後には、さらに輸送艦を中心とした輪形陣が続く。

この艦隊、「第一強襲艦隊」と名付けられた部隊は、北海道の釧路を目指していた。

目的は揚陸訓練である。釧路西方の海岸に、『大隅』『国東』に搭載された計四隻のＬＣＡＣを使い、歩兵一二〇〇名、戦車四八輜を基幹とした陸軍部隊を揚陸する。

少なくとも一般の将兵はそう説明され、それを信じていた。

だが、艦隊司令長官以下各戦隊司令官は、この「釧路演習」と名付けられた作戦の、本当の目的を知っていた。

防諜上の理由から、情報の開示は禁じられていたが、まもなく解禁時刻である。藤井は解禁時刻を迎えた時点で、本当の目的を伝えるように、艦隊の長官に厳命していた。

解禁時刻を迎え、イージス艦『霧島』に陣取る艦隊司令長官、早川則人中将は電話の受話器を取った。

電話はレーザー通信式の無線電話で、傍受される心配がないのが売りの、今回のような場合には重宝される逸品である。レーザーを使っているため、使用可能範囲は基本的に稜線内だが、衛星を介せば世界中どこでも通信可能である。

早川は受話器に声を吹き込む。

「第一強襲艦隊を預かる早川だ。作業を続けながら、落ち着いて聞いて欲しい」

早川は一拍置いた。これから言うことは、特に重要なことなのだ。「我が艦隊はこれより、択捉島を目指す」

おそらく、艦隊の全艦に動揺が広まっているだろう。

『霧島』の艦橋でも、将兵が驚きを隠せずにいる。訓練のつもりが択捉島に向かうなどと言われれば、真つ当な精神の人間なら、普通は驚くだろう。

傍らにいる『霧島』艦長、津田勲男大佐が、信じられないと言うような眼差しを、早川に向け、叫んだ。

「長官！ 本気ですか！？」

早川はいたって冷静に返す。

「もちろん本気だ。これは国防省、そして藤井首相の命令だ。我が艦隊は択捉島を目指し、七日早朝を期し単冠湾にて上陸作戦を敢行する」

早川が説明するが、その間に寮艦からも、津田と同様の質問が次々と寄せられる。

その返事として、早川は再び受話器に声を吹き込む。

「長官の早川だ。先ほどの指示は、間違いでも冗談でもない。我が艦隊は択捉島を目指す。これは藤井首相の命令である」

国防軍最高指揮官の藤井の名を出し、早川は命令が本物であることを伝える。

受話器を置き、早川は指示を出す。

「艦長、命令だ。針路を南東に向けてくれ」

命令とあれば、変針するしかない。

「はっ、針路、南東を指向します。航海長、面舵だ！」

「はっ、おーもかーじッ！」

命令を受けた航海長が、独特の抑揚をつけ、命令を伝達する。

艦体が左舷側に傾き、徐々に変針していく。目指すは敵地、国防軍の初めての実戦である。

第六話 北へ（後書き）

これは後書きでは無いのですが、今日、すなわち平成二十一年十一月十二日で、今上天皇陛下の御即位二十周年を迎えます。

御慶至極、喜ばしい限りです。

拙著では日本は周辺国との戦争に巻き込まれていきますが、本来は今上天皇陛下の大稜威に従い、日本の久遠の平和を護ることこそ、日本国民の義務だと思っています。

読者諸兄も日本を愛し、今上天皇陛下と日本国を、ますます盛り立て頂きたいと願います。

最後に、

天皇陛下万歳。

日本国万歳。

第七話 択捉戦役勃発（前書き）

いよいよ開戦です。

相手はロシアですが……。

第七話 択捉戦役勃発

二月六日 根室

北方領土の日の前日、藤井は北海道の根室を訪れていた。

この根室半島の先、海を越えたところに北方領土がある。半島の先端、納沙布岬の目と鼻の先に歯舞群島がある。その北東には色丹島、色丹島の北に国後島、国後島の東に択捉島がある。そのさらに先が千島列島である。

藤井がそんな最前線の町にいるのは、今日、北方領土の返還を訴えるための集会がここ、室蘭で開催されるからであった。

藤井が自ら参加することで、現政権の北方領土への関心の高さをアピールし、北海道での支持率向上を狙う。同時に首相が参加すれば、それは当然全国に報道される。これにより、国民に自国が抱える領土問題への関心を高めるといふ、打算があつた。

藤井は一通り演説を行い、最後にこう締めくくつた。

「私は、北方領土問題に関し、近日中に大きな成果があることを、確信しております。近い将来、北方領土が日本に返還されることを、国民に約束できましょう」

藤井は強気に言い切つた。

明日は釧路近郊で、陸海空軍共同の上陸訓練を行い、藤井もそれを観閲する予定なので、自信の根拠はそれであろう。

この時点では、ほとんどの人間がそう考えていた。

二月七日 釧路近郊

早朝、釧路近郊の海岸に、大勢の人々が詰め掛けていた。マスコミや軍事オタクと呼ばれる一般人が、国防軍の姿を一目見ようと、カメラ片手に押し掛けていたのだ。

今回の上陸訓練では、空軍のステルス戦闘機、和製ラプターこと心神や、陸軍の新鋭戦車の一〇式戦車、中でも主砲を五五口径一二

○ミリ滑腔砲に換装した一〇式戦車改が参加するのだ。

めったなことではお目にかかれない新型戦闘機や新型戦車が勢揃いする。注目度はいやが上にも高まった。

ひとまず、「釧路演習」作戦の第一段階、北部方面への戦力集中と釧路への注意の誘致は、成功したと見て良い。

第一段階は、訓練名目で戦力を集中すること、マスコミを利用してロシアの注意を釧路に引きつけることにあった。彼らマスコミや野次馬は、知らず知らずのうちに、情報戦の片棒を担がされていたのだ。

だが、いつまで待っても、艦隊は現れない。当然、上陸訓練も行われない。

予定時刻を三〇分も越えたころ、さすがに群集が不審に思い始めた。

そのうち、先ほどまでインタビュに応えていたはずの、藤井の姿が消え、何か問題があったのではないかという声が聞こえ始め、海岸に、さまざまな憶測が飛び交った。

首相はそこ、護衛とともにヘリに乗り込み、一路新千歳国際空港を目指していた。そこから政府専用機で、東京まで舞い戻るのだ。

「釧路演習」作戦は、新たな段階を迎えようとしていた。

ほぼ同じころ、ロシアの首都モスクワでは、日本の大使の手により、宣戦布告が行われていた。

そして、択捉島に日本軍が上陸を開始した。後に主戦場の島の名から、択捉戦役と呼ばれる戦いの始まりだった。

同日 択捉島単冠湾

爆音を轟かしながら、LCACが艦隊と海岸を往復していた。

ロシアの哨戒線を迂回した結果、陸軍は完全な奇襲上陸を果たした。

海岸には瞬く間に橋頭堡が築かれた。途中、警備隊と小競り合いがあり、負傷者が出たが戦死者はなく、作戦は順調に進行していた。陸軍の上陸地点は単冠湾と留別湾に挟まれた、択捉島のなかで幅がもっとも狭い地点である。一両日中には、択捉島を東西に分断できる見込みだった。

第八話 ロシアの苦悩

二月一〇日 択捉島

日本軍の上陸から三日が経ち、ロシア軍警備隊は東部の薬取に押し込まれていた。背後は標高一三二二メートルの神威岳、そしてラツキベツ岬である。その先は択捉海峡。警備隊は完全に追い詰められていた。

制空権は完全に日本軍の手に落ちている。

オホーツク海も日本軍が制海権を握っており、他の三島の警備隊も生殺し状態である。

今のロシア軍警備隊は、大東亜戦争で、南海に取り残された日本軍将兵と、同じ状態だった。待てど暮らせど救援はこない。のたれ死にを待つだけの遊兵である。

また、北方領土には、多数の民間人も暮らしており、そちらも何とかしなければならぬ。ロシアは警備隊と民間人を、人質に取られたようなものだった。

二月一日 ユジノサハリンスク

樺太南部のユジノサハリンスクに、大量のロシア空軍機が集結した。

対日反攻作戦の第一段階、制空権の奪取を行うための戦力である。なかには爆撃機、攻撃機が多数含まれていた。地道に制空権を奪うのではなく、日本軍が使用している北海道の飛行場、空港を官民問わず破壊し、日本空軍を活動不能にしようというのだ。

だがそれは失敗した。日本空軍が機先を制し、ユジノサハリンスクに爆撃を行ったのだ。

警報が出されてから日本機が姿を現すまで、時間はほとんどなかった。

現れた機体はF2戦闘攻撃機だった。攻撃隊の発見が遅れた理

由は、彼らが樺太の目と鼻の先、稚内から出撃したことと、宗谷海峡を低空で突破したためだった。訓練名目で事前に北海道各地の空港に、航空戦力を展開したことが、ここでも日本側に有利に働いた。対応が遅れたロシア軍は、邀撃機の離陸が間に合わなかった。スクランブル待機の機だけが、何とか離陸できたが、それだけである。せっかく集めた機の多くは、離陸する前に滑走路が破壊された。日本軍の攻撃隊は二四機で、集結したロシア機を全て破壊するのは、物理的に不可能である。

集中的に狙われたのは、滑走路と管制塔だった。この二つを破壊すれば、ロシア機は飛び立てない。

滑走路と管制塔を破壊した後、日本機は飛び去った。日本軍の爆撃は、即座にモスクワに伝えられた。

航空機の損失はさほどでもないが、滑走路が破壊され離陸不能だという。

日本機二機を撃墜したが、ロシア側は四機が撃墜され、八〇機以上が行動不能となった。

もう一度これらを戦力化するには、一本でも良いから滑走路を修復しなくてはならない。

これは並大抵ではない。滑走路と言っても昔のように、ただ平らなら良いという訳ではないのだ。

ロシア大統領のセミョーン・M・シデンコは、この報告を聞き激昂した。

「なぜユジノサハリンスクにこれほどの航空機がいたのだ!？」

シデンコは電話で、作戦の責任者に怒鳴った。

『はっ、日本海にイージス艦二隻を含む艦隊が展開しておりまして、沿海州からの出撃では大損害が予想されたので、ユジノサハリンスクに集結させたのです。作戦が完全に裏目に出ました……』

「裏目に出ただと!? 八〇機が行動不能だぞ!？」

シデンコは泣きたかった。八〇機と言えば、極東に展開している作戦機の八分の一である。

よりもよって、自分の任期中に開戦し、しかも敗勢など、信じられない。信じたくない。

だがとにかく、爾後を考えなければならぬ。

制空権を確保できない以上、海軍は使えぬ。

制空権を確保しようにも、日本との戦いだけに戦力を集中する訳にはいかない。ロシアの国境は長大であり、それを守るには大量の航空機が必要なのだ。

制空権が確保できなければ、艦隊は一方的に撃破されてしまう。そもそも純粋な艦隊戦であつても、ロシア海軍が日本海軍に勝てるかどうか、微妙なところである。

ロシア海軍は日露戦争以降、まともな艦隊戦を経験していない。研究はしているが、日本海軍のような実戦経験はないのだ。

せめて制空権を確保し、有利な状況下で戦いたいが、航空戦力が足りない。

むろん、海を渡れないのだから、択捉島奪取など不可能である。

日本本島を爆撃しようか？

シデンコは本気で考えたが、すぐに諦めた。

そんなことをすれば、アメリカが介入してこよう。日米同盟はいまだに健在なのだ。

今は局地戦だからアメリカは静観しているが、全面戦争となれば黙つてはいない。アメリカが参戦すればロシアに勝ち目はない。

戦場を津軽海峡以北に限定すると、地理的にロシアは不利となる。

「中国が沖縄を攻撃してくれば良いがな」

そんなことはありえない。シデンコにはわかっていた。

日本軍は佐世保に、イージス艦『愛宕』ヘリ空母『山城』揚陸艦『下北』を基幹とする艦隊を待機させ、中国などに備えている。発展途上の中国海軍では、敵うとは思えない。

当然、日本を仮想敵とする中国も、この情報は掴んでいよう。現時点で中国が日本を攻撃するのは、ありえない。

「いったい、どうすれば良いんだ……」

シデンコは頭を抱え、呻くように呟くしかなかった。

第九話 第二強襲艦隊の憂鬱

二月一二日 東京

藤井は国防省中央指揮所に詰めていた。戦いのすべての情報が、一元的に管理されているそこは、日口開戦以来藤井の住処と化していた。

中央指揮所はもともと、非常時官邸としての機能を有している。もちろん、有事に備えたものである。

宣戦布告から五日、日本軍は戦いを優勢に進めていた。択捉島の完全制圧は時間の問題であり、また先日の戦闘では極東ロシア軍の航空戦力に、大打撃を与えることに成功した。

藤井としては、そろそろ和平を提案したい。ロシアのシデンコ大統領が応じるのなら、すぐに講和するつもりである。

藤井が気になっているのは、ロシアよりもむしろ、中国の動向であった。そこでSIB局長の井上に、情報の収集とともに別の情報のリークを命じた。

それは、新造ヘリ空母『山城』の情報である。

『山城』は現在、藤井の命令により、佐世保にいた。

いまだ艤装中だったが、藤井は竣工したことにした。

とりあえず外観は完成しているので、中国側には、すでに『山城』は完成していると言う、偽情報を流したのだ。

しかし、冷静に同型艦の例と進水からの期間を見れば、嘘だと分かってしまう。

だが井上は巧みだった。

まず、艤装中という情報をおおっぴらに、なるべく派手に流す。次に、中国側の情報網に掛かるように、さり気なく『山城』就役の情報を流すことで、中国側を疑心暗鬼に陥れる。最後に仕上げとして、中国の偵察衛星を使う。艤装中とは言え、『山城』は自走可能なまでに仕上がっているので、洋上を航行中の『山城』を中国の偵

察衛星に、撮影させるのだ。

謀略と乗員の訓練を兼ねたものだが、中国は作戦通り『山城』を就役したものと、信じ込んでいる。

『山城』は佐世保に待機している、第二強襲艦隊に編入されている。

第一強襲艦隊に比べ、規模は小さいが中国軍による南西諸島、尖閣諸島、あるいは韓国軍による対馬への襲撃に対処するための艦隊であり、規模よりも小回りを優先した艦隊編成であった。

同日 佐世保

第二強襲艦隊旗艦『愛宕』から、司令長官の加瀬泰忠中将は、己の指揮下に置かれている艦艇の中で、ひととき異彩を放つ二隻の艦を眺めていた。

揚陸艦『下北』と、ヘリ空母『山城』である。

この二隻が、第二強襲艦隊の基幹なのだ。

陸上部隊を輸送する『下北』と、ヘリの洋上基地となる『山城』、どちらが欠けても艦隊は機能しない。

だがそう考えると、現在艦隊は機能していないことになる。

加瀬は第二強襲艦隊の司令長官を拝命した時、正直に栄転を喜んだ。

ところが、実際に着任してみると、艦隊はとんだ張り子の虎だった。

『山城』は表向き就役していることになっているが、実は艤装すら完了していないのだ。せっかくのフェイズド・アレイ・レーダーは張りぼて、艦内の一部には電力の供給すらできない。いまだに通路を電線がのたくっている。

『山城』の乗員や作業員のなかには、「いつそ艦名を『信濃』にしてみまえ」と言う者もいる。

加瀬は着任後、川村に聞いたことがあった。「この張り子の虎で、何をしろと言うのですか？」と。

川村の答えはこうだ。

「第二強襲艦隊の任務は、中国に対する牽制だ。確かに現在の第二強襲艦隊は張り子の虎だが、要は中国側に張り子と気づかれなければ良いのだ。君の仕事はそれだよ」

SIBのお陰もあり、今のところ艦隊の実情は中国側に気づかれていないようだ。

加瀬はプレッシャーを感じていた。いつ中国側が真実に気がつくか、不安にさいなまれる日々である。正直、精神衛生上、劣悪な環境だった。

早いところロシアと和平をして欲しい。

加瀬は願っていた。

第一〇話 和平成立

二月二〇日 モスクワ

対日戦に悩むシデンコのもとに、北方領土に関する動きが伝わった。

択捉島陥落から五日、ついに国後島に日本軍が上陸したのだ。

択捉島に上陸した日本軍の一部と、北海道に展開する第七師団から抽出された部隊らしい。

択捉島からの部隊は、すでに小規模ながら実戦を経験しており、しかも勝利したので士気が高い。

また、第七師団は現在日本軍が有する唯一の機甲師団で、もともと北海道と北方領土での戦闘を想定して編成されている。

国後島警備隊の苦戦は必至だろう。

ここに至り、シデンコは日本との和平を決意した。ロシアから中国経由で日本へ和平交渉の打診があったのは、二月二一日のことだった。どうやら、国後島への上陸が効いたらしい。

補給を絶てば国後島など、敢えて占領する必要はなかった。ただ択捉島陥落後、膠着しかけた戦局を動かすために、きっかけを作ったかったのだが、どうやらこの攻撃で日本の、不退転の意志を示すことになったようだ。

早速和平に向けて、日本も動きだした。

交渉の舞台は瀋陽だった。

この瀋陽はかつて、日露戦争有数の激戦である、奉天会戦の舞台となった場所である。

かつて日露が死力を尽くし、当時史上最大と言われた戦いを演じた街が和平交渉の舞台なのだから、大いなる皮肉である。

日本側使節は高階外務相が全権、補佐には副国防相の田中勤が付いた。

ロシア側の全権は同じく外務相のゲルマン・A・オニチenko、

補佐にはアルセニー・N・ザスラフスキー空軍准将が付いた。

交渉はスムーズに進んだ。

敗勢のロシア側には、もともと主導権などない。交渉は日本側のペースで進んだ。

交渉の結果、北方四島の日本への返還が叶った。

ロシアの警備隊は撤退し、民間人も退去が決定した。

かわりに日本は、ロシアが実行支配を続ける南樺太、千島列島を、正式にロシアが領有することを認めた。

ただし北方四島と南樺太、千島列島には条件があった。

それは非常時を除き、北方領土を非武装地帯とすることだった。占守島―樺太上を通る北緯五〇度―瑤瑤瑠水道―野付水道の中での、軍事行動及び戦力展開を禁止するものである。ただし、区域内での居住とそれに伴う経済活動、治安維持などの警察活動は認められた。また、互いに戦争賠償は請求請求しないことも決定した。

捕虜は半年以内に解放することも、確認された。これは主に日本に課せられた条文だが、ユジノサハリンスク爆撃の際、撃墜され捕虜となった日本軍パイロットが二名いるので、ロシア側も従う義務があった。

また、日本はロシアの天然ガスを、優先的に購入する権利を得た。これは七〇年にわたり北方領土を占領していたことに対する、賠償の意味があった。もっとも、日本が天然ガスを買えばロシアも儲かるので、どこまで賠償の効果があるかは不明である。

この瀋陽条約は、両国の国会でただちに採択され、互いに三月一日に批准した。

択捉戦役は呆気なく幕を閉じ、オホーツク海に平和が戻った。

第一〇話 和平成立（後書き）

ついにロシアから北方領土を取り戻しました。

ただ、作者的に今回の択捉戦役は地味だった気がします。
最後まで呆気ない気が……。

第一一話 択捉戦役後

三月五日 東京

対口戦終結後、藤井は首相官邸に住居を戻していた。

今は二階の自宅部分の住人は、藤井一人のみである。藤井には離婚歴があり、現在は独身なのだ。

一人暮らしのメリットとして、誰にも気兼ねせず機密事項のやりとりができることが挙げられる。

官房長官を務める熊谷和也は、支持率について藤井と協議していた。

「最近は一〇パーセント代後半で落ち着いています」

熊谷の言葉に藤井は、苦い顔をした。

真正保守として敷島新党を立ち上げた時、国民はそれを歓迎した。藤井が首相に就任し組閣した時は、その支持率は八〇パーセントを超えた。景気が持ち直したこともあり、また、国民が政治に変化を求めた結果だった。

しばらくは七二パーセント前後で横ばいだったが、昨年の中国との一悶着のあと、若干支持率に陰りが見え始めた。そして今回の北方領土をめぐる、対口戦である。

北方領土を奪回したことは評価されたが、その手段が戦争というのが頂けなかった。特に戦場が近かった北海道では、支持率低下が顕著だった。

当然と言えば当然である。実際にロシア軍は、北海道への爆撃を計画していたので、情報が遅れれば北海道に大きな被害が出ていただろう。また、半月とはいえ空港を空軍が使っていたので、戦場となる危険と相まって観光産業に大きな打撃があった。そして藤井が気にしているのは、なにも支持率だけではない。

「野党が文句をつけてきたよ」

野党の議員が、最近騒ぎ立てていた。

「講和できたから良いものの、もし負けたらどうするつもりだったのか」などと、勝手に開戦したことに対し、責任問題を持ち出す議員までいる。

真つ当な批判ももちろんあった。「ようやく景気が持ち直し始めたばかりの今、巨額の出兵費用は再び不況を招く可能性もあった。それほどのリスクを冒してまで奪回する価値が、北方領土に果たしてあったのか」などである。

国防軍に戦死者も出ており、滑稽なほどに人権を重視する今の日本では、これも不利に働いた。下手な答弁をすれば、支持率はさらに低下。内閣総辞職さえありうる。

このままでは、“あれ”が手に入らない。経済の問題が挙げられた以上、このまま軍事に巨費を投じるのは、リスクが大きすぎる。

しかし“あれ”は、日本に必要なのだ。クレイリー大統領の要望でもある。

「そこは岩田さんに任せるしかありません。首相は野党と国民を鎮めることに、専念してください」

熊谷の言葉に、藤井はうなずいた。

「そうだな、“あれ”は存在自体が批判的になりかねない。もう商談がまとまっているのだから、非難をかわすことを考えるべきか」「はい、川村さんや高階さんにも骨折りしていただきました。それを無駄にするべきではありません」

熊谷の言葉に、藤井は再びうなずいた。その瞳には、強い覚悟が表れていた。

同日 北京

自らの執務室で、魯は書類を読んでいた。内容は日本軍のことであつた。

「ほう、これはなかなか興味深い。奴ら墓穴を掘ったな。ようやく小日本に鉄槌を下す時がきたぞ！」

魯は高笑いを始めた。

その視線のはるか彼方には、上海があった。

第一二話 空母購入

四月一〇日 ノーフォーク

一隻の巨艦が護衛を伴い、出港した。

フラットトップとアングルド・デッキ、右舷のアイランド。

輪形陣の中心に陣取る艦は、紛う事なき航空母艦である。それも、煤煙が一切生じないことから、原子力空母と思われる。

ノーフォークから出港した原子力空母だが、護衛は日本海軍の艦艇である。ちなみに言えば、空母の乗員も、半数が日本人になっている。

この原子力空母は、つい先日までアメリカでCVN-65『エンタープライズ』と呼ばれていた艦である。

『エンタープライズ』は世界初の原子力空母であり、竣工からすでに半世紀が経過している。CVN-21型原子力空母一番艦『ジエラルド・R・フォード』の就役に伴い退役の予定だった。

退役後は解体されるはずだったが、突如日本が中古で購入したいと、名乗りを上げたのだ。

日本なら支払いは確実であり、解体に必要な費用も払わずに済む。去年七月から極秘に行われた商談の結果、『エンタープライズ』は退役を一年前倒しし、日本に売却された。

その金額は桁違いである。約八七億ドル、日本円でおよそ一兆円。世界経済を牛耳る二国だから実現できる、スケールの大きすぎる商談であった。

だが実を言えば、日本は代金を払っていない。正確には、現金で払ったのではない。

財政難の日本には、八七億ドルは大きすぎた。現金を用意するのは難しい。

日本は国債を使ったのだ。ただし、日本国債ではなく、アメリカ国債である。日本が保有する巨額のアメリカ国債のうち、八七億ド

ルをアメリカに返却したのだ。
つまり、書類上は確かに八七億ドル支払われたが、実際に現金は動いていない。

同日 百里

日本の首都防空を司る百里基地のエプロンに、藤井の姿があった。その前には、二〇機ほどの戦闘機が鎮座していた。

「これが……、震電！」

藤井に震電と呼ばれた戦闘機は、異形の機体だった。震電と言えば、大東亜戦争末期に九州飛行機が開発していた、エンテ型の邀撃機である。

そして、いま藤井の前にある戦闘機も、震電という名の邀撃機である。そしてやはりエンテ型の機体であった。

藤井が政権を取った時、それと同時に再軍備と将来の空母導入は決定された。

空母だけあっても艦載機が無いのでは、意味がない。同時に開発が始まったのが、この震電であり、独自路線の仕様に仕上がっていた。

これまでのアメリカに追随した兵器でもなく、輸入機でもなく、日本オリジナルの艦載機を開発したことから、原子力空母購入にかけた日本側の意気込みが窺えた。

それは新型機の命名にも見て取れた。

もちろん機体形状からの連想もあるが、かつて日本の空の守護神と期待された戦闘機の名を復活させたことは、それだけこの新型機にかかる期待が大きいということである。

エンテ型の戦闘機は、機体をコンパクトにまとめることができる。これにより燃費が良くなり、また、軽くなるので離着艦時に有利となる。

また、カナード翼は非常に敏感だが、ジェット機ではこれは格闘性能の向上につながる。実際、試験飛行では圧倒的な格闘性能を示

し、開発陣を驚喜させた。

原子力空母と新型戦闘機。

日本海軍はここに、ようやくまともな打撃力を手に入れた。

四月一日 東京

藤井とクレイリーは、電話で会話をしていた。盗聴の心配がない、ホットラインである。

『ビッグEが借金のカタに取られて、私は悲しいよ。借金はするべきではないな』

クレイリーは冗談めかして言った。

「それではまるで、私は借金取りです。まあ、おかげで安い買い物できましたが」

『なに、もともとスクラップにする予定だったんだ。少しでも借金が減るなら構わないさ。それに、日本軍が強力になれば、我が太平洋軍の負担が減ることになるからな。しかし、半世紀も前の艦を買うなど、君ももの好きだな』

「確かにCVN-65は老朽艦ですが、性能的には陳腐化していません。それにあの艦は、一〇年も保てば良いのです。技術と経験の取得が目的ですから」

『本当か？ 中国と戦争をする気じゃないのか？』

鋭い。藤井は思った。技術、経験の取得が目的というのは嘘ではない。いずれは、国産空母を建造するつもりなので、その準備が必要なのだ。

だが、本音を言えば軍拡を続ける中国に、対抗するという思惑もあった。中国海軍は空母を建造しているのだ。

一から建造しても、中国には追いつけない。ならば既製の艦を購入しつなぎとするのも、選択肢としてはありだろう。

「中国と戦争など、損失が大きすぎます。ようやく景気が上向いてきたのに、また不況になってはたまりませんよ」

『そうかな？ 経済力のスタミナなら、日本が上だと思うが』

「中国は経済的な影響が大きいです。ロシアならともかく、中国との戦争となればたとえ勝っても、我が国の経済は破滅しますよ」

クレイリーは、藤井の嘘を見破った。

日本の企業が、中国から東南アジアにシフトしつつあることを、アメリカも掴んでいた。

藤井の首相就任後の、中国からの企業の撤退。

表向き、度重なる増税と賃金の急上昇から、採算が採れなくなり各企業は撤退した。だが、その裏に中国を仮想敵とする、政府の働きかけがあったのだ。企業が拠点を移した国は、ベトナム、インド、インドネシアが主である。

インドとベトナムは潜在的に中国の敵国、インドネシアは東南アジアの中心的国家。日本が中国と交戦した際、経済的損失を極力減らし、いざという時にアジア諸国の支援が得られるように、下地を作っている。

クレイリーとアメリカは、そう分析していた。そしてそれは、大部分が正解であった。

第二二話 空母購入（後書き）

日本がビッグEを購入しました！
原子力空母です！

しかも艦載機は震電という名のエンテ型の新型機です！
筆者的には最高です！ テンション上がります！！

第一三話 情報交換

台湾の近代史を語る上で、日本との関わりは切っても切れない。日本と台湾の交流が盛んになったのは、安土桃山時代である。この頃台湾は、倭寇の拠点であり、東南アジアに向かう日本船の寄港地であった。

この時代、豊臣秀吉は台湾に宛て親書を送ったことがあり、また、堺の商人、納屋助左衛門は一六一一年に台湾を探検したという、記録が残っている。

江戸時代初期には徳川家康は有馬晴信に、台湾探検を命じた。鎖国後、日本と台湾の交流は途絶えた。

しかし明治に入り、日本と台湾の関係が復活した。

きっかけは、台湾に漂着した琉球人五二名が現地民に殺害された、牡丹社事件であった。

日本はこれに対し報復として、西郷従道陸軍大輔を総指揮官に、軍艦五隻、船舶一三隻、兵員三六〇〇名を差し向け、当時台湾を治めていた清国は、日本政府に賠償金五〇万両を支払った。

その後日清戦争を経て、台湾は日本に割譲された。現地の有力者は反発し、台湾民主国を建国したが、北白川宮能久親王率いる近衛師団の前に一敗地にまみれ、瓦解した。

日本統治時代台湾は、一気に近代化を遂げた。

電気、上下水道の整備、医療、治水、治山、交通網の整備……。

さまざまな物が持ち込まれ、瞬く間に台湾は開拓された。

大東亜戦争の後、日本は台湾を手放した。

後釜に座ったのは、中華民国国民党だった。彼らは国共内戦に敗北した後、台湾に逃げ込み再起を図った。

そして半世紀以上も、“大陸の中国”と“海洋の中国”は台湾海峡を挟み、睨み合いを続けた。

五月二〇日 台北

喫茶店に、二人の男がいた。テーブルの上のカップは、ほとんど手を付けられない。ともに背広姿で、ビジネスマンのように見える。

「御社も市場に参入しますか」

「はい、お陰様でようやく事業拡大のメドが立ちました」

「もちろん、その際は……」

「分かっております。御社との提携は、弊社のたつての希望です」

「それは我が社も同じことです。我々の相手は巨大ですから」

「連中の営業は凄まじいですからね」

「まったく、あの人数は反則ですよ。各個にやり合っても駄目です。それこそ連中の人海戦術で、市場は独占されてしまっています」

「ここは互いに、手を組むのが賢明ですね。ところで、御社が提携なされているポトマック海運は、動きますか？」

「いいえ、彼らはアジア市場に関しては、現状に満足しているようです。参入したとしても、大したことはありませんまい」

「そうですね……。共闘できれば心強いのですが」

「仕方ないかと。アジア市場は当分、我々と永定輸送の闘いとなりましょう」

「気になるのは、漢運輸と大同運輸です。互いにライバル視していましたが、最近、水面下で密かに繋がりを持っているらしいと、情報がありましたか」

「あちらの市場は微妙な塩梅ですね。両社が争ってくれば、漁夫の利を狙えましょうか」

「漢運輸との提携の可能性は、あるでしょうか？」

「どうでしょう。これまでの経緯を考えれば、可能性はありますが、漢運輸は我が社を嫌っていますから、なかなか難しいですね」

「ヤムナ運輸とホン運輸は、提携を前向きに検討したいそうですが？」

「はい、我が社にも打診がありました。四社提携がなれば、永定輸

送にも十分対抗できますから」

「ぜひまとめたい話ですね」

一人が時計を見やった。すでに時刻は午後四時を過ぎていた。

「今日はお陰で有意義な話を聞けました。今日中に日本に戻る必要があるので、失礼させてもらいます」

「そうですか、それでは空港まで送りましょう」

「いいえ、大丈夫です。お構いなく」

「しかし、永定輸送の目があるかもしれません」

「それもそうですね。それでは空港までお願いします。車の中で話したいこともあります」

「分かりました。それでは行きましょうか」

二人が乗った自動車は、空港にむかった。

第一四話 “北”からの接触

六月一五日 東京

S I Bは多忙を極めていた。

中国との緊張が高まりだしたのは、藤井が「村山談話を踏襲しない」と断言してからだった。中国はあの手この手で藤井を失脚させようと、裏で策謀をめぐらした。

しかし今のところ、この目論みは実を結んでいない。S I Bと公安が手を回し、未然に阻止しているのだ。

藤井が対中強行路線を突き進めば、中国の圧力も強まる。当然、S I B、公安の負担も増える。S I B局長の井上も、忙しい日々が続いていた。

(今日は完全に午前様だな……)

年代物の腕時計を見て、井上は思った。時刻はすでに、深夜と言える午後――一時を過ぎていた。

井上は駐車場に向かった。公用車を使えば楽なのだろうが、井上は公用車を嫌っていた。

彼は一般企業から引き抜かれたのだが、そのころから公用車は嫌いだ。自分たちが汗水流して納めた税金で、なぜ一日中待機という惰眠を貪る輩を養うのか。

国政に携わるようになり、運転手たちがただサボっている訳ではないと分かったが、それでも自動車の運転は自分で行うのが当然だった。

策謀に関わる組織の長として、危機管理には気を使うべきなのが、井上はその点、無頓着だった。

彼の頭には、日本で要人の誘拐や暗殺など、ありえないという思いがあった。

井上は、暗い部屋で目を覚ました。

駐車場で誰かに声をかけられたのは覚えているが、その後はまったく思い出せなかった。

突如スイッチを弾く音がした。室内が明るくなり、井上の瞳孔が縮んだ。

マンシヨンの一室だろうか、フロアリングの部屋だった。おそろくはリビング。

そこで井上は、自分の隣りに外務相の高階が倒れているのに、気がついた。

「高階さん、高階さん」

肩を叩かれ、高階も目を覚ます。

「気がつきましたか？」

二人の前に立っていた男が、声をかけた。訛りからして日本人ではないが、顔立ちからアジア系とわかる。

高階が声を上げる。

「なんだ君は？　ここはどこなんだ！？」

アジア系の男は、至極冷静に対応する。

「落ち着いてください、高階外務相。私のことは、神田と呼んでください。場所は教えられませんが、用事が済みしだい解放します」

神田の言葉に、井上が聞いた。

「用事？　我々を誘拐するほどだ、相当な用事なのだな？」

「はい、我が祖国の存亡に関わる問題です。ぜひ日本に頼みたいことがあるので」

神田の言葉に、高階が応える。

「そういう外交の話は、外務省を通してくれ。いきなり誘拐して直訴とは、穏やかではないな」

「申し訳ございません。なにしろ我が祖国と日本には、正式な国交が無いのです」

「君はいつたい、どこの人間だ？」

この質問にも、神田は丁寧な口調で答えた。

「私は、あなた方が北朝鮮と呼ぶ国の者です」

「！」

二人は衝撃を受けた。目の前に、北朝鮮の工作員がいるのだ。もしかしたらここは、すでに日本国外なのかもしれない。

神田はその心配を察したか、安心するように言う。

「大丈夫です、ここはまだ日本国内です。あなた方には、藤井首相に伝えて欲しいことがあるのです。拉致しては意味がありません」
伝えて欲しいことは、何だろうか。井上は意を決して問いただした。

神田の答えは、二人の予想外の物だった。

「我が祖国は日本との同盟を望んでいます！」

第一五話 “北”との同盟

六月一六日 東京

この日、首相官邸には早朝から閣僚が集まっていた。

非公式の会議だが、内容は急用であり重要なものだった。

そして会議の中心は首相の藤井ではなく、高階外務相と井上SIB局長である。

急な召集に閣僚たちは、藤井がまたしても突拍子も無いことをしでかすのではないか、と思つて集合した。

「首相、突然の召集とは、何事ですか？」

伊坂孝介総務相が聞いた。

「実は昨夜、高階君と井上君に北朝鮮の工作員が、接触を図つてきたのだ」

会議室がどよめいた。

その後高階、井上によつて工作員から伝えられた北朝鮮側の要望が説明された。

北朝鮮側の要望は、日本との同盟であつた。

去年朝鮮半島は冷夏だったが、その影響で農作物は大打撃を受けた。慢性的な食糧難だった北朝鮮では、すでに万単位の餓死者が出ており、政府の求心力は低下の一途を辿っている。

一昨年に兄の跡を継ぎ、最高人民会議で国防委員長に任命された金賢は、人民の反乱や軍部によるクーデターを恐れた。彼が国家指導者の地位を継いだ時、すでに国土は荒れ果て、外界から断片的にもたらされる情報によつて、人民の忠誠は揺らいでいた。

もはや国家的な破滅は時間の問題。

金賢は国家と、そして自らの生存のため、必死に考えた。

中国はアテにできない。自国内で年五〇〇件を超える暴動に悩む中国など、すでに頼りにならない存在なのだ。

韓国はどうか。おそらく無理だろう。日頃、南北統一を唱えているが、あくまでスローガンである。北朝鮮の負債など、背負いたくないのが本音だ。

アメリカを頼るのも、非現実的だった。これまでの経緯からして、支援などありえない。

金賢は気がついた。すぐそばに、底抜けにお人好しな国がある。日本という国が。

これまでのように、単純に脅しては駄目だ。現在の首相はかなりの鷹派である。下手をして戦争となれば、それまでであろう。

同盟と食糧支援の見返りに、日本の喜びそうなものが要だ。兄が残した莫大な負の遺産の中に、それはあった。

北朝鮮側が要求したのは、同盟と食糧支援だった。

見返りとして、拉致被害者のうち、生存者全員を解放する。拉致に関して、正式に謝罪しても良い。日本に照準しているノドンも、放棄する。

「確かに条件は悪くないが、あの国は信用できないからな」

国交相の内藤正が疑念を含む声で言った。

「そうだな、私も食糧支援だけ受け取り、約束を反故にしないか、そこが心配だ」

藤井も同様の意見を述べた。

「そこは、向こう側が先に条件を実行すれば良いだけだ」

この熊谷の言葉に、数人頷いた。

文科相の佐井美津代が、意見を述べる。

「しかし、北朝鮮が率先して条件の履行をしますか？ それに、これからの計画を考えれば、北朝鮮との同盟は不利でしょう」

これからの計画とは、中国との戦いである。緊張状態が続いている今、内閣はすでに全面戦争を覚悟していた。

いよいよの時は、圧倒的な中国の兵力に対抗するために、国際世論を味方に付ける必要がある。したがって、悪の枢軸、テロ支援国

家と批判される北朝鮮との同盟は、今は避けるべきではないか。

佐井の意見は至極当然のものだった。

藤井は頷きながら応えた。

「その通りだ。もし北朝鮮と同盟するのなら、一度国家を解体してもらうしかない」

「難しいですな」

伊坂がつぶやいた。

北朝鮮との同盟は、現実的ではない。いつそ勝手に自滅させた方が良いのではないか。

だが川村は、同盟するべきと考えていた。

「しかし、下手に自滅されても困る。もし中国が介入すれば、戦略上不利になる。逆に一〇万の人民軍と弾道弾を味方にできれば、利用価値は高い。中国東北部、旧満州は経済的に重要な地域だ。北京にも近いから、それらに絶えず圧力を加えることができる。中国の大軍を拘束できれば、我々に有利だぞ」

川村の言葉に、藤井は唸った。確かにこれは魅力的だった。もし北朝鮮の人民軍、それも第八軍団あたりが中国に浸透してくれれば、相当の打撃を与えられるだろう。

だが、他の軍事に疎い閣僚たちは、やはりイメージが優先しており、同盟締結には反対の立場だった。

「同盟なら、北朝鮮崩壊後でも良いじゃないか」

大半の閣僚がこのような意見だった。

高階と井上は、北朝鮮に援助が必要だと言った。その理由を高階が述べる。

「工員の方々の言葉なのですが、「北朝鮮は放っておけば勝手に崩壊するが、その場合核弾頭がどうなるか、保障しかねる」だそうです」
再び会議室がどよめいた。

「それでは脅迫ではないか！」

熊谷が叫んだ。

核弾頭を搭載した弾道弾が、混乱の中で何かの拍子に暴発したら

……。あるいは核弾頭が第三勢力、特にテロリストなどに渡つたら……。

会議室内が、水を打ったように静まり返る。

「つまり同盟締結しか、北朝鮮の核の脅威を無くす方法はないのだな」

藤井が、諦観に満ちた声で言う。

核弾頭の暴発やテロリストへの流出など、もはや日本だけの問題ではない。

「どうやら、北朝鮮を助ける必要があるようだ。日本の印象の悪化が気になるが……」

悩む藤井に、井上が提案した。

「北朝鮮を日本の主導で、民主化すれば良いのです。内戦を防げば、支援を含めて多くの人命を救ったと主張できます。それに核弾頭の暴発や流出を防ぎ、国際平和に貢献したとも主張できるのでは？」

藤井はすぐに同意した。

「なるほど、それは良い。さっそく北朝鮮解体の計画立案を頼む。外務省は特使の人選だ。財務省は支援に必要な費用の試算、それから医療支援もありうるから、厚労省は医師団の編成も準備してくれ」
核の脅威を持ち出されては、閣僚たちも賛成するしかない。藤井の指示に返事をする、会議は終了した。

後日発表された日朝の国交樹立と同盟は、日本国民のみならず、世界中を驚かせたのだった。

第一六話 “北”の解体

七月一五日 平壤

金賢は悩んでいた。

何に悩んでいるのかと言うと、中国である。

日本と同盟を結び、各種物資の支援を取り付けたが、今度は中国が圧力をかけてきた。中国はこれまで散々北朝鮮に支援をしてきたが、それを無視して敵対している日本と同盟したことが、気に食わなかったようだ。

中国は日朝同盟締結直後、国境に軍を集結させた。演習と称しているが、脅しであることは明らかだった。

以前、台湾で総統選挙を行った時、同じように大規模な軍事演習を行ったことがあったが、北朝鮮の場合、中国とは川を挟み地続きなので、脅威度は遙かに高い。

国境に展開している兵力は北朝鮮が上だが、兵士の練度も兵器の質も中国が上だろう。北朝鮮の人民軍は弾薬、燃料の不足でろくに訓練ができずにいる。兵器などはいまだにＴー３４やミグ１９が現役なのだ。一応更新は行っているが、遅々として進まない。

結局、再び日本に泣きつくしかない。

空母戦闘群は無理だが、航空戦力ぐらいは出してくれよう。

同日 東京

開かれたばかりの北朝鮮大使館から、救援要請があったのはつい先ほどのことだった。

中国が北朝鮮に、圧力をかけているのだ。

中国としては北朝鮮は弟分のようなもので、日本との同盟とは、裏切り行為に等しかった。

もちろん藤井は北朝鮮を助けるつもりである。すでに北朝鮮は、日本の画策する対中大同盟の一角であり、各種情報も提供している。

ここで北朝鮮が寝返れば、それらは全て中国側に筒抜けになってしまう。

それに、このような事態はある程度、想定されていた。

藤井は川村と井上に指示を出した。

「本当は平和的なプランAが良かったが、仕方がない。プランCを実行しろ！ 北朝鮮を民主化するのだ！！」

七月二十五日 平壤

日本の救援が到着した。まだ武力衝突していないと言うのに、いきなり地上部隊を派遣した。

C-130Hが空港に着陸し、陸軍の将兵が降りていく。

彼らは特殊作戦群の将兵である。その後ろからは、中央情報隊が続いていた。

どう考えても、同盟を支援するための編成ではない。数も少なかった。C-130H二機では、大した量は運べない。彼らはあくまで先遣隊である。本隊は後日、輸送艦で運ばれてくる。

そしてこの特殊作戦群と中央情報隊からなる先遣隊には、本隊到着前に片付けなければならない仕事があった。

七月三〇日 平壤

金賢は執務室で総政治局の、白熙洪陸軍大将と向き合っていた。

双方、微動だにしない。白熙洪の手には拳銃が握られ、その銃口は金賢に向けられていた。

「なんのつもりだ？」

金賢が聞き、白熙洪が答える。

「祖国のためです。閣下には、国政から身を引いていただきます」

「貴様、本気か！？」

「冗談でこのようなこと、しませんよ」

「しかし、君一人でできると思うのか？ 平壤は人民軍が固めている。日本軍もいるのだ、政変など……」

その言葉を聞き、白熙洪は部屋の外に合図を送った。

直後に室内に乱入してきたのは、自動小銃を構えた日本軍兵士たちだった。

特殊作戦群である。彼らは短銃身型の89式小銃を、金賢に突きつけた。

さらに、特殊作戦群の後から、一人の男が入室した。彼は日本で神田と名乗り、日朝同盟締結を実現させた工作員、安延康だった。

その姿を見た瞬間、金賢は激昂した。安延康は工作員としての腕はそこそこだが、金賢は彼を気に入っていたのだ。裏切られたようなものだった。

「安！ 貴様も裏切るのか！？」

安延康は冷静なまま、金賢に告げた。

「申し訳ありません。実は、日本との同盟には条件がありまして」「条件？」

「はい、我が国の民主化が、その条件です。本当はもっと、平和的な方法を望んだのですがね」

金賢はそのような話は、一切聞いていない。ただ同盟は可能とだけ、報告を受けていたのだ。初めて真相を知り、金賢は茫然とした。安延康はさらに続ける。

「先に言っておきますが、軍はすでに我々が掌握しています。軍は貴方よりも、食料と新式の兵器を提供してくれる、日本に忠誠を誓っています。妙な気は起こさないでください」

白熙洪が、安延康に続いた。

「さて、一般市民として余生をすごすのも、他国に亡命するのも、貴方の自由です。国政にさえ関わらなければ良いのです。それとも一生を刑務所で過ごしてみますか？」

金賢の顔が青ざめる。

生き残るためには従うしかない。

「……分かった。君たちの指示に従う。……その代わり、命の保証はしてくれ」

金賢は両手を挙げ、立ち上がった。

北朝鮮で突如惹起した政変は、成功した。

朝鮮民主主義人民共和国は、朝鮮民主国と名を変えた。

白熙洪陸軍大將を臨時国家元首とし、ゆくゆくは完全な民主化を目指すことになる。

白熙洪が独裁者となる懸念もあったが、日本軍が監視しているのでその心配は少なかった。

中国は朝鮮民主国を日本の傀儡国家として、承認しなかった。

他国でも、似たような見方が大きかったが、日本は北朝鮮を民主化したこと、食料、医療支援を含め多くの人命を救ったことを、強調した。

そのため、人権意識の高いヨーロッパでは、EUを中心に朝鮮民主国承認の機運が高まった。

対テロ戦争に苦戦するアメリカもこの動きを評価し、朝鮮民主国を承認した。

また、朝鮮民主国が、すべての拉致被害者を救出し、国籍を問わず解放すると発表した。アジア中で拉致が行われていたため、アジア諸国は半ば世論に押される格好で、朝鮮民主国を承認することになった。

そして極東でもう一つ、大きな動きがあった。台湾が、北朝鮮の政変に同調するように、独立準備を始めたのだ。

一ヶ月後に国民投票を行い、独立の是非を問うことになった。

当然中国は猛反発し、北朝鮮に続き台湾に圧力をかけはじめた。

日本は東シナ海に空母戦闘群を派遣し、中国に対抗の意志を示した。

もはや、日中両国は一触即発であり、東シナ海は新たな“極東の火薬庫”と化したのだった。

第一七話 首相狙撃事件（前書き）

いよいよ中国との開戦間近です。

宣戦布告の口実を得るために、藤井首相が悪知恵を働かせますよ。

第一七話 首相狙撃事件

八月一五日 東京

この日、藤井はやはり靖国神社を参拝した。北朝鮮の政変や台湾の独立準備など、極東では大きな動きが続き、緊張状態が続いている。

さすがに今年の参拝は、諦めるのでは？

このような予想も多かったが、藤井には関係なかった。

中国との関係がこじれたところで、いまさら大したことはない。実のところ、むしろ今回の参拝は、中国との関係を絶つための儀式でもあった。

藤井が公用車を降りたとき、事件は起こった。

突然、公用車の窓ガラスが弾けたのだ。続いて一拍遅れた銃声……、狙撃されたのだ。

幸い藤井は無事だったが、辺りは騒然となった。

S Pが藤井以下閣僚の周りを固め、急遽参拝は中止。首都圏の随所に臨時の検問が張られた。

当然、首相狙撃の情報は瞬く間に日本中に広まり、さらに世界に伝えられた。

使用された銃はおそらく、旧ソ連のSVドラグノフ狙撃銃。日本警察の発表に慌てたのは、ロシアだった。旧ソ連、つまりロシアの銃が使用されたのだ。昨年、ロシアは日本と戦い、北方四島を失っていた。このタイミングで旧ソ連製の銃が使用されたのでは、ロシアによる犯行という見方がもつとも有力となってしまう。

ロシア政府は慌てて弁明したが、ロシアに対し不審の目が向けられ始めた。そもそも最初から弁明するところが、余計に怪しい。

だが、翌日午前二時過ぎ、事態は急展開を迎えた。

両国橋に設置された検問で、一人の中国人男性が捕らえられた。

その男は54式手槍……いわゆるトカレフと、ドラグノフ狙撃銃が使用する7.62×54ミリ弾を所持していたのだ。

最初は銃刀法違反容疑だったが、尋問の結果、中国共産党の指示で藤井の暗殺を行ったと、判明したのだ。

これを受け、日本では中国への宣戦布告の機運が高まった。

藤井は、計画の予定通りの進展にほくそ笑んだ。

何のことはない。捕えられた中国人は冤罪で、すべては宣戦布告の口実を作るための、自作自演の事件なのだ。

54式手槍は安価なため、日本の暴力団が大量に密輸した結果、入手は比較的容易で、今回使用したものも、暴力団から押収したもの。ドラグノフ狙撃銃は、先の対口戦で鹵獲したものを基に、中国仕様に改造したものなのだ。

藤井は首相官邸で、中国人の自供後新たな命令を下した。

「よしっ！ 第一艦隊に命令だ！ ただちに寧波を攻撃し、中国空母を撃沈せよ！！」

八月一六日 東シナ海

昨日、突如入った藤井首相狙撃の情報、そして突然の寧波爆撃命令。

いったい、何が起きているのか。

第一艦隊旗艦、原子力空母『瑞鶴』艦上は、事態がまったく飲み込めないでいた。

台湾を掩護する目的で東シナ海に展開していたのに、宣戦布告もしないうちに寧波を攻撃など、常軌を逸していた。

「確かに首相の命令なのだな？」 第一艦隊司令長官、幡多裕文海軍中將は、三度目の確認をした。通信員がそれに答える。

「はっ、発信は国防省ですが、藤井首相及び川村国防相も、許可を出しております」

「そうか……」

幡多はようやく命令を出した。

「分かった。命令とあらば、寧波を攻撃するしかあるまい。艦長、石田中佐、パイロットを集めてくれ。ブリーフィングを頼む」

艦長の中野晴芳海軍大佐と、エア・ボス……飛行長の石田俊哉空軍中佐は、了解すると、艦橋を後にした。

二時間後。

『瑞鶴』のフライト・デッキを、轟音が包んでいた。スチーム・カタパルトを使い、航空機が発艦していく。

機種は艦上戦闘機震電と、艦上攻撃機F-2Cだった。向かう先は寧波、目標は中国海軍が保有する、三隻の原子力空母である。

第一七話 首相狙撃事件（後書き）

少し不自然な部分があったかもしれませんが、
準備も無しにいきなり攻撃をくわえるのは、
かなり無茶な気が……
と言っより不可能では？

第一八話 寧波爆撃指令（前書き）

ついに日中大戦が始まります。

第一八話 寧波爆撃指令

八月一六日 東シナ海

幡多は『瑞鶴』艦橋から、攻撃隊を見送った。

（我々は戦争の引き金を引いたのだな）

興奮とも恐怖ともつかない、不思議な感覚がその心中に渦巻いていた。

発艦した攻撃隊は、F-2Cが三二機と、念のために震電を一二機つけた。これは『瑞鶴』が現在搭載しているF-2Cのすべてと、震電の三分の一だった。

搭載機数六八機は基準排水量七万五七〇〇トンの巨体にしては、寂しい数字であった。『瑞鶴』は米海軍にいた頃は、八四機を搭載していたのだ。

しかし、パイロットは粒ぞろいである。訓練期間の関係で発着こそ難があるが、一度飛び立てば彼らは寧猛な荒鷲に姿を変える。各部隊から選りすぐられた彼らの中には、対口戦で実戦を経験した者もいるのだ。

攻撃隊を率いる石田も、ユジノサハリンスク攻撃に参加したF-2パイロットだった。

攻撃隊は一気に西進し、寧波に到達した。

当然、中国軍もレーダーで攻撃隊を捉えており、邀撃機を上げていた。

だが、邀撃機といっても旧式の殲撃8型？が一六機に過ぎなかった。

空戦は一方的だった。殲撃8型？の放つ霹靂12はチャフ、フレアやECM、震電の機動性に惑わされ、一発もまともに当たらない。逆に、震電は易々と殲撃8型？の背後を取り、放たれたAIM4は次々と命中した。殲撃8型？は、逃げるだけで精一杯だった。陸

地や港内の対空陣地や艦艇も、慌てて迎撃を図る。

その間隙を縫い、F-2Cは突撃していく。三三機はそれぞれ目標を発見すると、猛然と襲いかかった。

放たれた対艦ミサイルASM-2は、ほとんどがフラット・トップを持つ軍艦を目指していく。ウリヤノフスク級原子力空母を基に、中国が建造した089型原子力空母である。

すでに一番艦の『広東』と二番艦『福建』は就役しており、寧波には東海艦隊に所属する『福建』が停泊しており、今回の最重要目標だった。

現代の火箭は白煙を吹き上げ、中国空母を目指す。

『福建』も、ただやられるだけではない。

周囲の友軍艦艇とともに近接防御火器、紅旗7及び37ミリ機関砲を撃ち上げ、迎撃を図る。

しかし、それらはお世辞にも連携が取れているとは言えない。データリンク・システムは、いまだに完全ではないのだ。

ASM-2も六四発とケタ違いの数であり、完全な防御は望むべくもない。

『福建』は悲鳴を上げた。

ASM-2が降り注ぐ。

『福建』も三発のASM-2を撃墜するという善戦をしたが、それが精一杯だった。

まず二発が左舷の舷側を撃ち抜き、さらに一発が艦橋に命中した。飛行甲板が歪み、特徴的な箱型の艦橋が砕け散る。さらに四発が飛行甲板に命中し、追い討ちをかけた。舷側のエレベーターが衝撃で脱落した。だがそれは大したことではない。四発のうち一発は飛行甲板を打ち破り、格納庫内で炸裂したのだ。『福建』は内部から破壊された。さきに命中した二発が作った損傷が拡大し、艦体そのものが歪みはじめた。

艦橋を失った『福建』は松明と化し、断末魔の悲鳴を上げながら暴走した。

指揮系統が全滅しコントロールを失った『福建』の進行方向には、必死で弾幕を張る駆逐艦『福州』がいた。

『福建』は『福州』の横腹を突き破った。

二隻はもつれ合い、身動きが取れない。ASM2がさらに襲いかかる。

二発が舷側、それも喫水線付近に着弾した。

舷側を破られた『福建』に浸水が発生し、傾斜が始まる。艦上の瓦礫が海面に降り注いだ。

この浸水が原因で、『福建』『福州』はやがて寧波に着底するこ
ととなった。

日本軍攻撃隊が去った後、寧波基地は炎に包まれていた。

宣戦布告以前の攻撃に、中国は日本を激しく非難した。

これに対し藤井は、度重なる条約への違反と内政干渉、中国共産党の指示による暗殺未遂への懲罰に過ぎないとし、同日、臨時国会を召集し、八月一八日に中国への宣戦布告を強行採決した。
ついに、日中大戦が勃発したのだ。

第一八話 寧波爆撃指令（後書き）

何だかとんでもない戦いでした。

実際の近代戦ではこんな戦い、ありえないでしょう。

ところで五二発のASM2は、どこにいったんでしょ？（笑）

あとは、宣戦布告前の攻撃ということで、諸外国の非難が恐いです。

第一九話 台灣独立

八月一八日 北京

魯は自身の執務室で、ただ呆然としていた。

身に覚えのない藤井首相暗殺未遂事件、突然の寧波空襲、日本の宣戦布告……。いったい、どうなっているのか。

そこに、秘書が一枚の紙を持ってきた。その表情はこわばっている。

書面に目をやり、魯は秘書が顔をこわばらせている理由を、理解した。朝鮮民主国を自称する小日本の傀儡国家が、中国に対し宣戦布告をしてきたのだ。

偽朝鮮民主国は、弾道弾を撃ち込むと脅しながら、停戦を呼びかけてきた。

「偽北朝鮮め、日帝などに媚びるか。こんな脅し、黙殺してかまわん。そもそもまっすぐ飛ぶかどうかも怪しい弾道弾など、恐れるに値しない」

魯は独断で黙殺を決定した。

逆に日本に降伏勧告を出し、上海空襲を逃れた『広東』を中心に、空母機動部隊を編成した。

八月三〇日 東シナ海

突然の開戦から四日、東シナ海は不気味な静寂に包まれていた。

だが、緊張感はずっとともに、確実に高まっていた。それは地震と同じである。目に見える兆候は無くとも、足下のプレート、あるいは断層に確実にストレスは溜まり、やがて破壊を伴い発散される。

発散されるのはおそらく、今日。

世界中が極東に注目していた。中国が動くとなれば、台湾独立の是非が問われる八月三〇日か、あるいは過半数の賛成票を獲得した場合、正式に独立宣言がなされる八月三一日と考えられる。緊張

のなか、国民投票が行われた。

だが、中国は動かなかった。

艦隊の再編に、予想以上に手間取ったのだ。

東海艦隊は寧波で大打撃を受け、戦力が激減してしまった。

特に痛いのは、やはり空母『福建』の喪失だった。これで現在実戦で運用できる空母は、北海艦隊の『広東』一隻となってしまった。艦装中の『江蘇』が就役するまで、日中の洋上航空戦力は互角か、へり空母がある分限定的ながら、日本が優勢となっていた。

再編に手間取ったこともさることながら、空母『瑞鶴』の存在が大きかった。『瑞鶴』が東シナ海に留まっているため、中国は迂闊に動けなかった。洋上航空戦力で劣る今、貴重な『広東』を失う訳にはいかない。この再編の遅れと艦隊保全主義が、戦局に大きな動きをもたらした。台湾の独立である。

賛成五二・二パーセントと、僅差での独立となった。

だが、独立は独立である。日本と北朝鮮は独立と同時に承認し、さらに相互防衛同盟を締結した。

九月一日 台中

台湾国空軍の戦闘機が、台中飛行場を次々に飛び立っていった。飛び立ったのは、ミラージュ2000I5EIが三二機だった。

編隊は台湾海峡上空で、別の編隊と合流した。合流した編隊は四機、複座の単発機が三二機、一風変わったエンテ型の単座機が一機。『瑞鶴』の艦載機である。

三機種八六機の大編隊は、大陸の内陸に向かっていった。目的地は福建省永安である。建省永安には、人民解放軍第二砲兵部隊のミサイル発射基地があり、96167部隊が駐屯している。

第二砲兵部隊は戦略ミサイル部隊。つまりは弾道弾を扱う部隊であり、台湾が独立を果たせば攻撃を行うのは確実だった。

今回の日台合同の攻撃は、このミサイル発射基地を使用不能にすることが目的である。すでに弾道弾は発射態勢に入っている可能性

が高く、早急に破壊する必要があった。

第一九話 台湾独立（後書き）

すみません、投稿がだいぶ遅れてしまいました。

前話の大幅改訂は、一気にやる気を殺ぎました。

現在、挫折しかけているのを、気合いで抑えているような状態で…。

以後は気をつけますが、また遅れるかもしれません。

第二〇話 福建航空戦

九月一日 普江上空

日台合同の戦爆連合は台湾海峡を越え、普江に沿って永安を目指した。

この動きは、当然中国側も掴んでおり、邀撃機を繰り出してきた。八六機の攻撃隊に対し、中国軍の迎撃隊は八〇機。機種は殲撃7型から殲撃10型まで、さまざまだった。だが殲撃11型、Su-30MKKどの精鋭の姿は見えなかった。可動率の問題で出撃できなかったのだ。もともと配備数が少ないうえに、可動率六五パーセントでは、まとまった機数を出撃させるのは難しい。単独で日台の戦闘機に、太刀打ちできる戦闘機なのだ。それを少数ずつ小出しして、いざという時にまとめて運用できないなどと言う事態になったら、たまったものではない。

ならば、個機の性能で劣ろうと、大量運用できる機体を出し、数で押すべきではないか。中国空軍はそう判断を下した。

実際、機数では攻撃隊が勝っているが、F-2Cは重い爆弾を抱えており、燃料を節約するためにも急激な運動は、なるべく避けなければならぬ。攻撃隊で実際に空戦ができるのは、震電とミラージュ2000-5EIの四四機である。

つまり、単純な戦力比率は攻撃隊一に対し中国軍一・八となるのだ。

しかも、震電とミラージュ2000-5EIは、F-2Cを守りながら戦わねばならないから、苦戦は確実である。

だが、実際に戦いが始まると、攻撃隊は思いのほか善戦した。

中国軍に対し、兵器の性能とパイロットの質で勝ったのだ。

殲撃10型はカナード翼を持つデルタ翼機で、格闘性能において震電と渡り合ったが、電子装備とパイロットの技倆で劣っていた。

ハイテク技術が物を言う電子戦では、資本主義経済のもとで研鑽

を続けた日台に、中国軍機はかなわない。

パイロットについても、日本はRIMPACや航空学生制度、さらに実戦で鍛えられた空軍の精鋭を投入している。実戦経験の有無は大きく、マニュアル通りの動きしかできない中国軍機に対し、震電は独自の戦法を織り交ぜ、敵を翻弄した。

戦力差を物ともせず、日台は中国軍機と互角以上に戦った。

空戦が終了した時には、中国軍機は数を大幅に減らしていた。当初八〇機いたのが、残ったのは四五機だった。殲撃7型などは悲惨なもので、空戦に参加した二八機のうち、半数近くの一三機が撃墜されてしまった。

攻撃隊は震電、F-2C各一機、ミラージュ2000-5EI三機が撃墜され、またF-2Cは一機が損傷し、『瑞鶴』に引き返した。

後に福建航空戦と呼ばれる戦いは、日台の圧勝に終わった。

ほとんど一方的な空戦が終わり、永安基地まで攻撃隊の行く手を阻むものは、無くなった。

そして一〇分後、永安基地は炎に包まれた。

同日 東シナ海

空母『瑞鶴』は、攻撃隊を收容していた。

艦橋では、幡多が作業を見つめていた。

收容されたのは、震電一機、F-2C二八機、合計で三九機だった。邀撃隊との戦闘でそれぞれ一機、永安基地攻撃の時にF-2Cがさらに一機撃墜された。また、F-2Cは空戦と基地攻撃で、一機ずつ損傷機を出した。空戦で損傷した機は、無事台湾の台中飛行場に着陸したが、基地攻撃で損傷した機は台湾海峡に不時着水し、脱出したパイロット二名は台湾海軍に救出された。

攻撃隊は赫々たる戦果を挙げたが、幡多の表情は暗かった。

これで震電は三五機。補充の予定は、ない。

F-2の派生型であるF-2Cはともかく、震電は現在生産が滞

っている。現在は、交換部品が生産されているだけというのが、実情だった。『瑞鶴』に搭載されている機体も先行量産型で、本格的な量産はいまだに始まっていない。量産ラインを確保できないうえ、これまでの機体とは一線を画す震電は、生産効率を上げることが難しい。一度失った機体は、いつ補充されるか分からなかった。

そして、機体の損失以上に幡多を悩ませるのが、パイロットの損失だった。戦死または捕虜となった五人は、空軍の中でも優秀な人材であり、空母への着艦技術を持つ貴重な存在だった。現在、日本で着艦技術を持つパイロットは、『瑞鶴』の飛行隊だけであり、こちらも容易に補充はできない。

まだ中国海軍の『広東』が健在な今、この損害は大きい。

もし、このまま消耗を繰り返したら……。

不安と重圧が、幡多に重くのしかかっていた。

第二一話 対韓外交

九月二日 北京

永安基地攻撃受く！

報告を受けた魯は、軍幹部を召集した。

基地がひとつ壊滅した第二砲兵司令員の宋智統一級上將と、迎撃に失敗し大打撃を受けた空軍司令員の孔延且一級上將、そして參謀總長の陳鐘臣一級上將は戦々恐々である。敗北の責任を負わされ、肅清されるかもしれない。

魯の表情は険しかった。

「またしても小日本に負けたぞ！？ しかも腹立たしいことに、昨日の戦闘には偽台湾の戦闘機も参加していたというではないか！！」
魯の怒鳴り声に、全員が肩をすくめた。

「この際敗北の責任はどうでも良い！ 小癪な日本鬼子どもを叩きのめす作戦を考えろ！！」

宋上將が即座に提案をした。首をつなぐには、なにか成果が必要なのだ。

「残った導弾を小日本の本土に叩き込みましょう！ このまま使わないうちに消耗するより、全弾撃ってしまった方が有効です。日本鬼子も本土が焼け野原になれば、さすがに音を上げるはず！」

台湾、北朝鮮の参戦はおそらく、日本がけしかけた物だろう。つまり日本さえ潰せば、あとは勝手に瓦解する。宋上將の考えは、あながち的外れではない。

だが、反対の声があがった。軍事委員会副主席の、張明慶である。「待て、そんなことをしたら、国際社会が黙っていないだろう。それに反撃されたらどうする？ 今は北朝鮮も敵ということ、忘れてはいかん。あの国の導弾に小日本の技術が加わったら、どうなると思う？ 宋上將は北京が焼け野原になって、責任を取れるのか？」
宋上將は沈黙した。人民の一億人や二億人、死んでもかまわない。

むしろ口減らしになる。だが国際社会から非難されるのは、面白くない。それにもし、北京が攻撃を受けたとなれば、軍や人民の士気に関わる。

導弾攻撃に反対した張に、魯が質問する。

「だか、なにか代案があるのか？」

「はい、あの三国は輸入なしには立ち行かない国です。ですからまずは潜水艦を使い、奴らのシーレーンを寸断して日干しにします。同時に韓国に働きかけ、こちらの陣営に引き込むのです。あの国の兵器は優秀ですから。あとは輸入の道を断たれた敵が焦り、攻勢をかけるのを待つのです。我々はそこで後の先を狙い、『広東』と原潜、それに韓国軍を加え逆襲をするのです」

張は一気に持論を述べた。

「なるほど、それは良いな。よし、海軍は潜水艦艦隊を動員し、敵の艦船を片っ端から撃沈しろ！ それから、『江蘇』の就役を急がせるのだ！」

同日 東京

首相官邸には現在、三つのホットラインがつながれている。それぞれアメリカ、台湾、北朝鮮である。

そのうちの一つ、北朝鮮のものからコールがあったのは、仕事が一段落し、藤井が休憩を取ろうとした時だった。

受話器を取ると、通訳を介し臨時国家元首の白大将の声がする。

白大将はいきなりこう言った。

『藤井首相、我が国の民主化は不可能です！』

北朝鮮では来年八月一日をメドに、国民選挙を実施する予定であった。もともと、民主化を条件に支援と同盟を行ったのだから、いまさら無理と言われては、まるで裏切りではないか。

藤井は問いただした。

「どういうことですか！？ 説明してください」

白大将は、即座に答える。

『我々には、民主主義の経験がないのです!』

「あつ!」

藤井は思わず声を出した。

言われてみれば、王朝支配、日本の統治、一党独裁と、有史以来北朝鮮は民主主義というものを、一度も経験していない。金一家の支配中は、四年に一度、形式的に代議員選挙を行っていたが、候補者が各選挙区に一人の選挙など、選挙と言えない。

『国民は戸惑っていますし、候補者も共産党の人間だけでは、これまでと大して変わりません』

「しかし、どうしろと言うのですか?」

『民主化はもとも日本側の要望なのですから、そちらから議員を何名か政治顧問として、招聘できませんか? 選挙はとりあえず延期して、民主主義を学ぶことが先決かと』

「しかし、我が国の議員を向かわせても、ろくなことにならないと思います。利権漁りをするだけでしょう。それに貴国はただでさえ我が国の傀儡と言われることがありますから、選挙を先延ばしして政治顧問など派遣したら、なんとと言われるか……」

『確かにそうですが……。しかし、どうすれば良いのでしょうか?』

「そうですね。この際、半島を統一したらどうですか? 政治顧問は同じ朝鮮民族の韓国から招聘し、ゆくゆくは合併ということではないでしょうか? なんなら我々からも、韓国側に働きかけます。この機に韓国も、我々の陣営に引き込めるかもしれませんし」

『なるほど、それは良いですね。ぜひお願いします』

白大将との会話を終え、藤井はすぐさま閣僚会議の準備に取りかかった。

第三話 韓国軍（前書き）

なんとか天長節の更新に間に合い、良かったです。
今回は韓国軍の問題点をえぐり出してみました。

第三二話 韓国軍

九月五日 ソウル

北朝鮮の日本主導での解体、日本の中国への宣戦布告、台湾の独立と、極東を揺るがす大きな動きが続いている。

当然、韓国もその動きの渦中にあった。

簡単に言えば、日本と中国の板挟みになっているのだ。

思えば韓国は常に両国の板挟みであった。元寇、壬辰倭乱、近代の日清戦争と、両国の間に位置する韓国は、常にその争いに巻き込まれてきた。今回も同じである。

日中とともに、同盟を打診してきた。それも、ほぼ同じタイミングで。

どちらかといえば魅力的なのは、日本側の提案である。

彼らは同盟を締結するなら、南北統一の支援を言い出した。「もしともに戦うのなら、北朝鮮に働きかけ、統一を呼びかける。

今すぐとは言わない。一〇年後二〇年後、政治や経済が安定してからでも、かまわない」と。

大韓民国大統領の鄭海は困っていた。朝鮮民主国建国にあたり、韓国は日本の介入を批判しているのだ。いまさらどのような顔をして、日本と組むというのか。これまで反日、辱日教育を繰り返し、領土問題も抱えている。やはり小中華を自称する以上、中国側にくべきだろうか。

だが、中国との同盟に猛反対した組織があった。軍部である。

なぜ中国との同盟に反対するのか、鄭は国防部長官の李仁東を呼び、聞いた。だした。

「なぜ中国との同盟に反対なのだ？」

鄭の問いに、李はなかなか答えなかったが、やがて、申し訳なさそうに口を開いた。

「倭奴と戦って、勝つ自信がないのです……」

中国側につけば、韓国軍は日朝の挟撃を受ける。そうなれば、北朝鮮に兵力で劣り、日本に兵器の性能で劣る韓国軍は、苦戦を免れない。

鄭は不服だった。韓国軍は実のところ日本を仮想敵に、大金をかけて兵力を整えてきたのだ。

「しかし、日朝は中国との戦いにも、戦力をつぎ込まなくてはならない。それに我が軍にも、イージス艦や日本と同じ、F-15戦闘機があるだろう？」

「大統領は北朝鮮の兵員動員数をご存知ですか？ 予備役、労農赤衛隊を含めて九五〇万人ですよ。兵器だってそうです。F-15Kの可動率は、六割ですよ。予備部品もろくになく、共食い整備と部品の使い回しを、繰り返しているのです。これはF-15Kに限ったことではありません。だいたい、一年中事故を起こし、マンホールにも撃破されるような状態で、どうやってF-35並みと言われるステルス戦闘機と戦えと言うのですか！？」

李は言い続ける。

「海軍もです。『世宗大王』はそもそも、設計にミスがあります。あんなトップ・ヘビーの艦で東海の荒波に耐えられる自信は、私にはありません。データリンクも、日本海軍ほど整っていません。VLSだけは八〇セルを揃えましたが、代償としてCIWSはたったの一基です。これでは死角ができてしまいます。他の艦艇も日本海軍に比べ、小型で個艦性能も劣る艦が大半です」

李は容赦なく自軍の問題点を列挙した。

主力戦車のK-1も北朝鮮には勝てるが、日本には苦戦するだろう。新型のK-1A1も設計に問題があった。小型の車体に一二〇ミリ滑腔砲を搭載したため、諸元の低下を招いてしまったのだ。

動員兵力は予備役を含めても北朝鮮の半分程度。敗勢の中国がどれほどあてになるかも、分からない。

ソウルは北朝鮮の目と鼻の先にあり、戦いになれば確実に被害を

受ける。

日本軍と戦えば、釜山も被害を被るだろう。

勝算のない戦いでこれまで築き上げてきた富を失うことが、李には許せなかった。

「我が国は断固として中立を守るか、たとえ参戦しても、日本側につくべきです！」

李は言った。

軍事には素人の鄭には、李が何を言っているのか半分も理解できないが、韓国軍が日本軍に勝てないと言っていることは、理解できた。

鄭の目にも中国は敗勢に見える。わざわざ勝ち目のない戦いをするより、勝ち馬に乗るべきではないだろうか。

鄭は悩み続けた。

第二二話 韓国軍（後書き）

韓国が日本と同盟を結びにくい理由はいろいろありますが、全部書くと長すぎるのでバツサリ切りました。
すみません。

第三話 中国空母出撃（前書き）

更新がだいぶ遅れてしまいました。
どうも、すみません。

第二三話 中国空母出撃

九月一〇日 北京

韓国が同盟について、返答を保留しているなか、アジアに新たな動きがあった。

魯はもたらされた情報に、判断を下す。

「絶対に日帝の計画を阻止しろ！ 『広東』も出撃させて構わん！」

同日 東京

藤井は政府閣僚と国防軍首脳を集め、激励した。

「良いな、この計画の是非で対中戦の行方は決まる！ 中国は確実に阻止を図るだろう。海空軍は、なんとしても制空権を確保してほしい！」

同日 ソウル

鄭は手に入れた情報を見て、決断を急がなかったことを、正解だったと思った。

「やはり、保留して正解だった。この計画の正否を見て、どちらにつくか、決めれば良い」

同日 ワシントンD.C

クレイリーは、ホワイトハウスの執務室で、その情報を知った。

「なるほど、日本の戦略が見えてきたぞ。果たしてどちらが勝つか。まあ、どう転んでも、合衆国には嬉しくないか」

九月一五日 葫芦島

中国海軍北海艦隊主力が、出撃した。原子力空母『広東』を含む、機動部隊である。

途中、北朝鮮海軍の小型潜水艦が、艦隊に接触した。即座に撃沈

されたが、この動きはすぐさま、日本側に知らされた。

（これで我が艦隊の動向は筒抜けか）　おそらく、東シナ海に居座る日本空母『瑞鶴』は、迎撃の準備を整えるはず。

艦隊の指揮を執る馬尽陶中将は、一気に気が重くなった。

もしも、現在唯一の原子力空母である、『広東』を沈められでもしたら、たとえ生きて帰っても、肅清の対象である。

『瑞鶴』はすでに『広東』の同型艦、『福建』を不意打ちとはいえ、撃沈している。『広東』が撃沈される可能性も、十分ありうる（いかな。将が後ろ向きでは、勝てる戦いも勝てない）

馬は自身が弱気になっていることに、気がついた。これは良くない。弱気が伝染すれば、士気の低下につながる。そしてそれは、敗北へとつながる。

艦橋を見回すと、士官はやはり緊張していた。これから、七〇年ぶりになる空母同士の戦いに、参加するかもしれない。敗北する可能性もあるのだ。

馬は部下の不安を拭うべく、しゃべり始めた。

「諸君、我が艦隊はたつたいま、偽朝鮮の潜水艦に捕捉された。潜水艦は撃沈したが、我が艦隊の出撃は、小日本にも知られただろう。だが恐れることはない。我が『広東』は、人民解放海軍の誇る、最新鋭の原子力空母だ。それに比べ、小日本の空母は半世紀も前の旧式艦、我々が負けることは、ありえないのだ。奴らも必死の抵抗をするだろうが、我々を止めることは、できるわけがない。諸君、我々は勝利するのだ！　創設以来、首都を守り続けた我ら北海艦隊の実力を、憎き小日本に見せてやれ！」

同日　東シナ海

第一艦隊にも、中国空母出撃の情報は、即座に伝えられた。

来るべき航空決戦に備えていた『瑞鶴』は、敵空母の出撃に、色めき立った。

なんと言っても七〇年ぶりの空母戦、それも原子力空母同士の戦

いである。日本海軍人として、興奮しないわけがない。

当初第一艦隊は、可動機のすべてをもつて、空軍を支援する予定だったが、主任務は敵空母撃沈に、変更された。

日本が恐れていたのは、中国海軍が空母を温存することだった。

『広東』を撃破しないうちに、現在、上海で艀装中の『江蘇』が就役すれば、洋上航空戦力は、日本が『瑞鶴』一隻に対し、中国は空母二隻となってしまう。そうなれば、中国はいつでも好きな場所を、好きな時に攻撃できることになる。

物量で負けている状態で、中国に戦いのイニシアチブを握られるのは、日本からすれば、敗北に等しい。

国防省は第一艦隊に対し、『広東』撃沈を、厳命した。

同日 東京

首相官邸で二人の男が話していた。

「そうか、中国の空母を引きずり出したか。予想以上の効果だな」

「はい、これで恐れていた事態は、回避できるかもしれません」

「樂觀視は良くない。もしこの決戦に負けたら、それは我々の敗北に直結する」

「分かっています。作戦には、我が軍の動員できる、全力を投入します。絶対に勝ってみせます」

「そうか。ところで、首相は？」

「はい、すでに出立しているそうですから、予定通り到着できるかと」

「分かった。細心の注意を払って、くれぐれも失敗のないように頼む」

第二三話 中国空母出撃（後書き）

試験が終わり、すでに冬休み。

にもかかわらず、更新速度は回復せず。

言い訳をするなら、現在、兄が帰省しておりまして、朝から晩まで日本の将来について、勝手に議論をしているため、執筆時間が減り続けているのです。

とにかく議論が面白くてたまりません。

また、更新が遅れてしまうかもしれません。

そしたら、ごめんなさい。

第二四話 バトル・オブ・フォルモサ

九月二二日 台北

台湾全土が、早朝から緊張に包まれていた。明日、戦争の行方を決する戦いが、始まるのだ。

台湾各地の飛行場、空港には、日台の空軍主力が集結していた。その数、五七〇機。さらに海岸線には、陸軍の高射砲、地对空ミサイルが列をなし、台湾海峡にも日台海軍の艦艇が、艦隊を組んで待機している。

まもなく、インド、ベトナムの代表がやって来る。日台朝と、軍事同盟を締結するために。

目指すのは日本の首都東京だが、台湾を経由し台湾總統の劉文凱と合流、日本を目指す。

だが、この動きはすでに中国にも知られており、これを阻止すべく中国軍も、航空戦力をこの戦線に集結させていた。その数、実に一二〇〇機。文字どおりのケタ違いである。なかには殲撃１１型やSU-30MKKなどの、新鋭機も含まれていた。中国軍が本気だということを示していた。

九月二二日 台湾海峡

中国軍が動いた。インド、ベトナムの代表を乗せた専用機は、現地時間の午前六時に到着する。中国軍はそれを阻止するべく、六〇〇機の戦闘機部隊を、払暁に飛び立たせた。

当然、これは日台に探知され、迎撃を受けた。艦隊と対空陣地は臨戦態勢に入り、空軍の戦闘機は次々と離陸していく。

日本空軍のパイロット、伊月大輔中尉は敵機を見て、違和感を感じた。

違和感ならこれまでも、感じてはいた。一〇〇〇機近い戦闘機
の空戦など、第二次世界大戦以来である。これだけの数のジェット機
が入り乱れる光景など、違和感を感じない方がおかしい。

だが、伊月が新たに感じたのは、それとは違う違和感だった。そ
の正体に、伊月はすぐに気がついた。

旧式機しかない。

敵機は殲撃7型と、殲撃8型だけである。この方面にいるはずの
新鋭機は、ただの一機もない。

MIIG-21のコピーに過ぎない殲撃7型など鎧袖一触。殲撃8
型にしても、似たようなものである。

イージス駆逐艦『金剛』『鳥海』からデータを受け取り、艦隊が
一斉に射撃を開始する。

陸地に展開しているパトリオット・ミサイルPAC2、改良ホー
ク改善？型が、次々と火を噴く。

敵機は瞬く間に激滅した。残存数は、四〇〇機強だろう。

「タリホー！」

隊長の命令に、伊月は愛機のF-15Jを駆り、突撃した。

四〇〇機以上もいた敵機は、三六〇機の日台連合軍に、食い破ら
れた。

三〇分続いた空戦は、日台の勝利である。中国軍は、大幅に数を
討ち減らした。

しかし、ここからが、本当の戦いだった。専用機が姿を見せたタ
イミングで、中国軍の第二波が来襲したのだ。

まずい！

日台連合軍の、全員が思った。

日台の戦闘機部隊は、先の空戦で、弾薬をだいぶ消費してしまっ
た。

慌てて、温存していた二一〇機が飛び立つが、相手は三倍近い。
しかも今度は、多数の新鋭機が含まれている。

考えてみれば、こちらが本命だったのだ。第一波は、弾薬を消費させるための罠。弾薬を消費し、防空網に隙が出来たところに、本命の第二波が突入する……。

日台連合軍は中国軍の策略に、まんまとはまってしまった。

日台の二一〇機の戦闘機が、戦場にたどり着く。

中国軍は六〇〇機の大編隊。日台は陸海軍の援護があるにしても、戦力差は圧倒的だった。

しかも今度は、日台の戦闘機とも互角に戦える、新鋭機が多数含まれている。勝てる可能性など、ほとんどない。

さらに困ったことは、専用機が到着したことである。これも守りながら、戦わなければならない。

とにかく、中国軍の射撃の邪魔をする。正面からまともに当たっても、物理的に阻止は難しい。ならば、機動で中国軍機が射点にくのを、防ぐのみ。主力が補給を終えるまで、なんとしても、持ちこたえるのだ。

再び台湾海峡で、熾烈な空戦が始まった。

今度は中国軍優位だった。数を頼みに、日台連合軍を圧倒する。

日台連合軍は、劣勢な戦力で専用機を守るために、意図的に巴戦をおこなった。巴戦、ドッグ・ファイトはもともと、意図して行うものではない。ドッグ・ファイトとは、互いに回避と追尾を行った結果、なるものなのだ。

だが、日台連合軍はそれを意図的に行った。専用機に近づく中国軍機を見ると、日台はその背後に、局地的な兵力の優越を作り、追尾する。そうすれば、中国軍機は回避運動をとるため、射点を確保できない。

しかし、六〇〇機である。まさに数は力だった。中国軍がついに、日台の防空網を突破した。

日台のパイロットが、慌てて機体を向けるが、間に合わない。負けた！？

誰もが思った。
が、まだ終わりではなかった。

一発のミサイルが、専用機に迫る中国軍機、殲撃10型に、背後から迫る。

弾着、そして炸裂。殲撃10型は、回避運動を取る間もなく、火の玉と化した。

いったい、どこから？

その疑問は、すぐに解かれた。

カナード翼を持つ、エンテ型の機体。胴体と主翼に描かれた、日の丸。震電である。

三五機の震電が、援軍として、台湾海峡に駆けつけたのだ。

三五機とは、『瑞鶴』航空隊の保有する、すべての震電である。

これは、幡多の英断だった。戦闘機をすべて派遣すれば、艦隊は丸裸になるのだ。

だが、幡多はそれにも手を打っていた。艦隊を守り、なおかつ、航空決戦に勝利する作戦である。

第一艦隊を、台湾海峡に突入させたのだ。専用機撃墜のために出撃した中国軍機は、すべて対空装備である。台湾海峡の制海権は日台にあり、実は台湾海峡突入は、あながち無茶な話ではない。

『愛宕』以下の第一艦隊の護衛部隊が、対空戦闘を開始した。

さらに、補給を終えた日台主力が、戦場に復帰し始めた。

こうなると、中国軍に勝ち目はない。結局、中国軍はこの後、防空網を突破できず、専用機が桃園空港に着陸した時点で、退却した。日台は合計で五二機を失ったが、中国軍の被撃墜四六七機に比べれば、ましな数字だろう。キルレシオは日台一に対し、中国軍は八九なのだ。もともとの戦力差を考えれば、日台の圧勝である。

同日 東京

航空決戦勝利の知らせは、瞬く間に藤井に伝えられた。戦勝報告

を聞き、集まっていた閣僚は、一様に安堵した。

これで、連戦連勝という実績ができた。差し迫る選挙戦では、優位に立てるだろう。

だが、藤井は浮かれる閣僚に、釘を刺した。

「まだ終わりではない。中国軍の空母は健在なのだ。中国空軍も、七〇〇機以上も残っている。明日、専用機が発発するとき、中国軍は再び攻撃を仕掛けるかもしれない。浮かれてばかりはいられないぞ」

戦いが終わると、閣僚は退出し、川村が残った。

「明日、本当に中国軍は攻撃するだろうか」

藤井の問いに、川村は答える。

「十中八九、攻撃はあるでしょう。これを阻止しなくては、中国軍の敗戦は、確実となりますから」

「そうか。それでは予定通りのむ」

「分かりました。明日は迎撃なしということ」

明日の確認を終え、川村も退出した。

第二四話 バトル・オブ・フォルモサ（後書き）

なんやかんやで、結局更新が遅れました。

なんだか、更新速度回復が不可能な気もしています。

いつそ、物語が始まる、平成二五年一月五日までに完結できれば…
…と割り切った方がいいかもしれません。

第二五話 空母決戦前夜

九月二二日 北京

深夜、陳上將と孔上將は叱責を受けていた。決戦に敗北し、四六七機も失ったのだ。撃墜されたなかには、新鋭機も含まれている。

「いったい、どう責任を取るのだ？ 撃墜された機には、首都の防空部隊から引き抜いた機もあつたのだ！ もし北京が攻撃を受けたとき、どう防ぐのだ！？ しかも専用機の撃墜は失敗だ！ 責任を取ってもらうぞ――！」

激昂する魯に、二人は黙ってうつむいていた。

二人に助け舟を出したのは、軍事委員会副主席の、張だった。

「主席、お待ちください。勝敗は時の運です。一度の戦いで負けたからといって、いちいち処罰しては、敵を利するばかりです。

二人に復仇の機会を与えてはどうでしょう」

「しかし、それでは示しがつかん」

「昔、漢の高祖劉邦は部下を大切にしました。だから負け戦ばかりにもかかわらず、高祖のもとには優秀な人材が集まり、最後は勝利できたのです。罰だけでは、人はついてきません」

張が言うと、魯も納得した。

「分かった。二人の処分は、当面保留しよう。ただし、手柄を立てたなら許すが、また失敗をしたなら次はないぞ」

「はっ！ ありがとうございます！」

陳上將と孔上將が敬礼すると、魯は張の方を向き、言った。

「しかし、二人に復仇の機会をと言うからには、なにか案があるのだな？」

この質問に張はすぐに答える。

「はい。先ほど入った情報ですが、桃園に降りた専用機は明日午前六時に出発する予定でした。しかし、インドの専用機に不具合があり、出発は午後になるようです。それまでに残存部隊を再編して、

『広東』と共同で撃墜するのです」

「しかし、できるのか？」

「はい、今日我が軍は大きく消耗してしまいましたが敵も一割を失いましたから、兵力比ではまだ、こちらが有利です。それに、我が軍が大損害を受けたので、敵も油断しているはずですよ。そこを突くのです」

「なるほど、それは良い。すぐに準備を整えろ！次こそは絶対に仕留めるのだ！！」

会議終了後、陳上将と孔上将は会議室を退出すると、張に声をかけた。

「先ほどは、ありがとうございました」

庇ってもらったことに、二人は感謝していた。

張は二人に、背を向けたまま答えた。

「構わん。あれは、自分のために言っただけだ」

この答えに、二人は首を傾げた。

「党の中枢にいる私が生き残るには、祖国に生き残ってもらうことだ。そのためには、君たちのような、育成に手間がかかる上級指揮官に、簡単に死なれては困るだけだ」

張はそう言いつつ、出口に向かった。

同日 東シナ海

『広東』は決戦に参加できなかった。黄海で、北朝鮮の潜水艦に捕捉され、それらの掃討に手間取ったのだ。潜水艦自体は、六〇年以上も前の旧式艦だったが、その数はすさまじかった。北朝鮮は『広東』を捕捉するために、五〇隻を超える潜水艦を投入していたのだ。

結局、慎重を期したため『広東』が東シナ海に出たのは、九月一九日で、東シナ海ではさらに日台の潜水艦に、つきまとわれることとなった。

このため『広東』は戦闘に参加できなかった。

そのうえ、日本の『瑞鶴』は参加し艦載機は少なからず活躍してしまっただ。

なので、北京から命令が届いたとき、馬中將は自分が処罰されるのではないかと、不安に支配された。

しかし届いたのは、処罰命令ではなかった。明日の午後に桃園空港を出発する専用機を、空軍と共同で撃墜せよとのことだった。

命令を受け取ると馬は、艦隊を南下させた。

同日 台湾海峡

第一艦隊は昼間の戦闘で撃墜された、パイロットの救助に就いていた。『瑞鶴』の艦載機には今回被害はなかったが、しかしだからといって友軍の救助に協力しないことは、有り得ない。

その『瑞鶴』の格納庫では、艦載機の整備が行われていた。

中国空母『広東』の動向は、潜水艦と衛星から逐一伝えられている。おそらく明日、台湾北部を攻撃圏内に収めることも、である。

明日こそはおそらく、空母対空母の決戦。

いざというときに全力が出せるよう、整備には余念がなかった。

準備は艦載機の整備だけではない。各艦は燃料、弾薬の補給をしなければならぬ。救助作業に補給作業と、第一艦隊は大わらわだった。

第二六話 東支那海波高シ

九月二三日 東シナ海

正午をまわった頃、中国空母『広東』から艦載機が飛び立っていた。その数二四機。原型の『ウリヤノフスク』は、スキージャンプとカタパルトを併用していたが、『広東』はスキージャンプのみであり、艦載機はSu-33であるから、『アドミラル・クズネツォフ』からの発艦風景にも、見えないことはない。

二四機のSu-33は編隊を組むと、南西に向かっていった。

同日 台湾海峡

補給を終えた日本海軍第一艦隊は、移動を開始した。

すでに中国空軍は再編を終え、出撃準備を整えているかもしれない。となれば、その標的はインド、ベトナムの専用機が、空母『瑞鶴』である。『瑞鶴』は現在、日本唯一の空母であり、何としても守る必要がある。

艦隊は台湾海峡を抜けすぐに、レーダーに北東から向かってくる機影を、捉えた。

「予定通りだな。待っていたぞ」

幡多はそれを見て、顔をほころばせた。ようやく、待ちに待った早期警戒機と電子戦機が、合流したのだ。

そして、合流した機を収容して間もなく、レーダーは再び機影を捉えたのだった。

二四機のSu-33は、レーダーに日本艦隊を捉えていた。艦隊には空母がいるのだろが、あいにく対艦装備はないため、攻撃はできない。

「妙だな……」

Su-33を率いる唐岱宗上尉は、日本艦隊を不審に思った。動

きがないのだ。悔しいが、日本軍の装備は優秀である。当然、編隊は捕捉されているはずだが、迎撃はない。

なぜ迎撃がないのか、唐は考えた。たとえば、連戦による弾薬、燃料の不足である。だが、原子力空母は艦の燃料タンクが必要ないため、より多くの物質を搭載できる。艦隊には、補給艦も随伴しているのです、簡単には物質は底を着かないだろう。予備部品の不足も同じ理由で、ないだろう。ひょっとすると、空母本体に不具合が生じたのではないか。相手は半世紀前に建造されたので、老朽化により何か問題が生じたのかもしれない。

唐は、日本艦隊発見と迎撃がないことを『広東』に伝え、空母に問題が生じた可能性を併せて伝えると、台湾を目指した。

二四機のSu-33が台湾上空に到着した時、ちょうど専用機が離陸していた。迎撃はない。唐は攻撃を命じた。

さらに北方からは空軍機が到着し、専用機に襲いかかった。もとが非武装の旅客機であるから、専用機はたちまち撃墜された。ようやく、基地から邀撃機が飛び立つが、中国軍は目的を達成しており、すぐに退避した。

同日 東京

市ヶ谷の中央指揮所には、台湾方面の戦況も、リアルタイムで伝わっていた。中国軍はやはり、再び動いた。空母の艦載機と空軍機が、協同で専用機を撃墜した。

「よし、良いぞ」

川村は戦況表示を見ながら、呟く。専用機を撃墜した中国軍は、撤退していく。計画通りの展開である。あとは今夜、すべてが決する。

同日 東シナ海

馬は唐からの知らせを聞き、攻撃隊の準備をさせた。

すでに互いに攻撃半径に入っているので、先に攻撃した方が、断然有利である。馬は準備ができ次第発進するように、命令を下した。

一方『瑞鶴』でもS u - 33の飛来方向から、『広東』の大まかな位置を、捉えていた。

F I 2 Cは準備でき次第、発進していった。『瑞鶴』の持つ二九機、すべてである。幡多はこの一撃に賭けていた。

敵機接近を伝える報告があつたのは、攻撃隊の発艦を完了した直後だった。馬は即座に防空戦闘を指示した。

一方でF I 2 Cも、そのフェイズド・アレイ・レーダーが、輪形陣を捉えていた。随伴のE A 18 Gグロウラーが、E C Mを作動させる。

F I 2 Cは散開した。『広東』の邀撃機が向かってきたのだ。S u - 33が一機、正面から向かってきた。F I 2 Cは、A S M 2の射点を確保すべく、突き進んだ。激しい機動は行わない。チャフ、フレアをばらまき、グロウラーのE C Mの支援を受け、ミサイル逃れ続ける。

やがて、中国軍の輪形陣を、射程に捉える。各機はA S M 2を放った。

ほぼ同時に、中国軍艦隊からも、ミサイルが発射された。F I 2 Cは回避運動をとる。

艦隊直掩のS u - 33は、敵攻撃機を二機撃墜した。

だが二七機は生き残り、対艦ミサイルを発射した。

「防空戦闘！ 何としても敵ミサイルを阻止しろ！」

馬が叫び、艦隊から海紅旗9 Aが、勢い良く撃ち出される。五四発のミサイルが、四散していく。

だが、防ぎきれない。まず、外側の防空駆逐艦『瀋陽』『石家荘』

が被弾した。『瀋陽』は一発、『石家荘』二発のミサイルを受け、沈黙した。輪形陣に穴が開き、その方面のミサイルの侵入を、許してしまった。

『広東』の機関砲が、火を噴いた。二発のミサイルが爆散し、『広東』のCICに、安堵感が漂った。

だが、それが一瞬の隙を生んでしまった。

「敵ミサイル、三発！！」

CICに、悲鳴のような声が上がった直後、『広東』を衝撃が襲った。

一方で、『広東』が放った攻撃隊も、間もなく日本艦隊を、攻撃しようとしていた。

レーダーに機影が捉えられた時、幡多は対空戦闘を準備させた。

直掩の震電が、カタパルトから打ち出され、三六機の攻撃隊を、迎え撃とうとしていた。

第二七話 空母撃滅

九月二三日 東シナ海

『瑞鶴』と『広東』が放った攻撃隊は、互いに敵空母を攻撃していた。『瑞鶴』の攻撃隊が、『広東』を攻撃しているころ、Su-33三六機も、日本海軍第一艦隊に襲いかかるうとしていた。

『愛宕』がSu-33を捉えた直後、幡多は震電に出撃を命じた。現在、『瑞鶴』が搭載する震電は、三五機。そのうち一機、電子機器が故障してしまった機があつたが、三四機が戦闘可能であつた。幡多は飛行可能な三四機、全てを発艦させた。三基のカタパルトをフル活用し、震電を打ち出した。

だが、三四機を発艦させるのは、時間がかかりすぎた。Su-33は、すでにだいたい接近していた。そのため迎撃は、すれ違いざまの一撃のみとなつてしまい、ほとんど戦果を上げられなかった。震電は四機を撃墜するに止まった。

『愛宕』以下、艦隊も対空戦闘を開始した。三二機のSu-33を、ミサイルが束となり襲う。たちまち一七機が撃墜された。だが一五機はそれでも怯まず、突撃を続けた。

『瑞鶴』は輪形陣の中央にあつて、SAM、RAMを撃ち続けていた。

艦橋では、艦長の中野海軍大佐が、防空戦闘の指揮を執っていた。一五機のSu-33が放ったミサイルは、合計で三〇発。ほとんどが、『瑞鶴』と『愛宕』を狙っていた。

一発のミサイルを撃墜したが、さらに六発が向かってくる。間合いが小さく、RAMは間に合わない。

「CIWS射撃開始！」

中野が叫び、二〇ミリ機関砲が、射撃を開始し、二発が爆散した。

だが、四発は防げなかった。

「衝撃に備え！」

中野の声の直後、四発のミサイルは『瑞鶴』に吸い込まれた。

『広東』の攻撃隊は射点につく前に、大半が撃墜されたが、李熙一中尉は諦めなかった。何とか日本空母に向かい、二発のKh-31Aを放った。

その直後、彼の体は機体ごと碎け散ったが、二発のKh-31Aは『瑞鶴』を痛撃した。彼と友軍が二発ずつ放ったKh-31Aは、四発が艦体各所に命中したのだ。

『瑞鶴』は爆発を起こした。四発の命中弾を受け、一挙に空母としての機能を喪失してしまった。三発はフライト・デッキを吹き飛ばし、一発が舷側に命中した。そしてこの一発が、深刻な被害を与える。『瑞鶴』は、元アメリカ海軍の空母である。当然、格納庫は解放式だが、ミサイルはそこに突入してしまい、艦体を内部から破壊した。

CICに陣取った幡多は、足下から突き上げるような衝撃を受けた。命中弾は四発。どうやら、大きな被害を受けたらしい。すぐにCICにも、被害報告が上がってきた。フライト・デッキはほぼ全損した。またハンガーで火災が発生していた。火勢が強く、弾薬への誘爆の可能性があるという。

『瑞鶴』が炎に包まれているところ、『広東』もまた、その身を劫火のごとき炎に、焼かれていた。

馬はすでに旗艦を移しており、『広東』の放棄と自沈の命令も出ていた。だが艦内にはまだ、艦長の楊錦明大校以下、多くの人員が残っていた。動力に原子炉を使用しているため、これを閉鎖しなければ放射能漏れにより、深刻な汚染を招きかねない。

「この海は全てわが国の物、人民の財産である。命に代えても、汚染を防げ」

馬の敵命に楊大校は、自らが『広東』喪失の責任を負う、人身御供となったことを悟った。

原子力空母を失ったのだ。どうせ生還しても、死刑である。結局死ぬのなら、死刑より戦死の方が、幾分マシだろう。

楊大校は、『広東』で死のうと決意した。

戦闘終了から一時間後、『瑞鶴』はついに誘爆を起こした。

「ここまでだな……」

幡多はこの状況に、『瑞鶴』の放棄を決意した。中野も、『瑞鶴』が助からないと、判断を下した。

「そのようですね」

中野は即座に総員退去を命令し、幡多の方を向いた。

「旗艦を『愛宕』に移すべきです。司令にも、移乗をお願いします」
「分かっている。君も早くしろ」

幡多も中野に、退艦を促す。だが、中野は断った。

「いいえ、私は艦に残ります」

その答えに幡多が、中野を見る。

「残るだど？ まさか、艦と運命を共に……、などと考えていないだろうな？」

「そのようなことは考えてません。私は本艦の責任者として、原子炉を封鎖します」

「そうか。閉鎖を完了したら、絶対に退艦しろ。君は27CV計画に必要な」

中野も頷く。

「分かっています。必ず退艦するので、先に行ってください」

中野が敬礼し、幡多は返礼すると、CICを後にした。

『瑞鶴』は最後の時を迎えた。老朽化した艦体は、爆発の度に部

品が脱落していく。やがて、右舷前部のエレベーター付近から亀裂が入り、大量の浸水が始まった。見る間に傾斜が強まっていく。

『瑞鶴』が完全に沈没したのは、二日後のことだった。

第二八話 対中大同盟

九月二三日 東京

東シナ海の花戦がすでに終結した午後七時、藤井は羽田空港にいた。隣には高階と川村もあり、陸軍第302保安中隊も整列していた。

「来ました。特別輸送機です」

川村の声に藤井が滑走路を見やると、日の丸を描いた旅客機が二機、着陸しようとしていた。インド、ベトナム、台湾の代表を迎えに行った、日本の政府専用機である。二機はインド、ベトナムの専用機と空母『瑞鶴』を囷に、三国の代表を日本に送り届けたのだ。着陸した専用機に、タラップが取りつけられ、代表たちが姿を見せる。三人の代表は赤絨毯の上を歩き、藤井のもとに向かった。

藤井が三人と握手をした。

「ようこそ日本に。この度は今上陛下はご多忙なれば、代理として私どもがお出迎えを申し仕りました。遠路はるばるいらした皆様には、ご無礼お許しいただきたい」

握手の際、藤井は口上を述べた。いきなり無礼を詫びたのは、藤井が日本の元首を、天皇陛下と考えているからである。国費を迎えるにあたり、行政の責任者に過ぎない藤井が出迎えることを、詫びたのだ。本来なら、羽田空港まで御行幸願いたいのだが、衆議院選挙を控えている今、天皇の政治利用を批判されるのは、面白くない。一行は、赤坂離宮に向かった。

到着後は迎賓館にて、記者会見である。現在インド、ベトナム、台湾の代表は、台湾上空にて戦闘に巻き込まれ、行方不明となっているため、まずは生存を知らせるのだ。そしてその後、さらに重大な動きがあった。

記者会見の場では、インド首相のアインシュタイン・シェカール

氏が、中国軍の手でインド、ベトナムの政府専用機が撃墜されたことに、遺憾の意を述べるとともに、両国は中国からの賠償と謝罪がない場合、武力行使も辞さないと、強硬な態度を示した。

その後、白大將が迎賓館に到着し、日台朝印越五力国の代表が勢揃いした。

フラッシュが焚かれる中で、五人はそれぞれ、文書に署名した。

“日台朝印越五力国による対中華人民共和国相互防衛同盟”、通称“対中大同盟”が締結されたのだ。

九月二四日 北京

対中大同盟の結成は、中国政府を揺るがした。

インドとベトナムの政府専用機を撃墜し、日本海軍の空母を屠り、祝杯を挙げたばかりである。同盟締結を阻止し、差し違えとはいえ、敵の有する唯一の空母を撃沈したのだ。戦局は優位になりつつあるはずだった。

だがまたしても、日本に謀られた。撃墜した専用機は四。代表をみすみす見逃し、大同盟結成を許してしまった。インドは、軽空母と原子力潜水艦を保有し、核ミサイルも持っている。

そしてそのインドに、専用機撃墜で、参戦の口実を与えてしまった。

敗戦。

この言葉が、魯の脳裏に浮かんた。

魯はすぐに軍首脳を集めたが、皆、沈痛な面もちであった。

「小日本は対中大同盟などというものを、結成した。その対策を考えろ」

魯は命じた。

だが、良案は思い浮かばない。先の戦いで、新鋭機をふくむ、多数の航空戦力を失い、空母『広東』も失った。核ミサイルも、インドが保有しているので、脅しにはならない。通商破壊は、実質的に

南海艦隊の戦力のみで行われるうえ、ようやく配置に付いたばかりである。

ここで発言したのは、張である。

「こうなったら、勝利にこだわるべきでは、ありません。敗戦が決定的となる前に、停戦するしかないでしょう。幸い、わが国は国連の常任理事国です。小日本は国連を尊重していますから、そちらから働きかけましょう。小日本が抜ければ、大同盟などは、勝手に瓦解するはずです。それから、『江蘇』の就役を急がせるとともに、予備役の通常型空母も復帰させて、そちらからも圧力をかけましょう」

張が一通り意見を述べると、魯は頷いた。他に、良い作戦は思い浮かばなかった。

第二八話 対中大同盟（後書き）

第二八話の投稿ですが、都合により若干遅くなりました。

実は数日前には出来ていたのですが、どうしても、本日更新したか
ったのです。

と言うのも、本日二月一日は紀元節なのです。

本日を以て、日本は皇紀二千六百七十年となりました。

誠に御慶至極であります。

私はこの二千六百七十年の歴史と伝統、そして日本の、久遠の平和
を護ることは、日本人の義務だと思っています。

これから、そのための努力を怠るべきではありません。
日本国万歳。

第二九話 国際連合

九月二五日 ニューヨーク

この一ヶ月、国連総会は、日中の罵り合いに終始していた。戦争で敵を悪く言うのは当たり前だが、それに巻き込まれて辟易しているのは、各国の国連大使である。

中国はこの日、経済発展著しい中国と経済大国の日本が争うことは、世界的な損失であるとして、国連を仲介しての停戦を提案した。この提案に、アメリカ力は賛成した。アメリカ経済にとって、両国の争いは耐え難い損失である。

大多数の国が賛同したが、常任理事国のなかで、ロシアが反対した。ロシアは中国に武器を輸出しており、また石油、ガスも瀋陽条約で対日輸出が伸びており、今回の戦争では大きな収益が見込まれた。

何はともあれ、ロシアが反対したため、国連は動けない。

中国は常套手段に打って出た。中国の胡端連大使は、かつての戦争を持ち出したのだ。

「今回の日本の攻撃で、我が国は多大な犠牲を出した。これはかつての侵略の再現であり、国際連合は旧敵国条項に則り、これを阻止しなければならぬ！ 日本に与し、我が国を侵略する国も、同罪だ！ 彼らは対中大同盟などと抜かしているが、これは大東亜共栄圏の再現だ！ 国際連合は、断じてこれを裁く必要がある！！」

中国の批判は、日本のみならず同盟国にも及んだ。大同盟の結束を、崩そうと言うのだらう。

だが、日本の斎木紘大使も黙ってはいない。

「今回の戦争を、我が国による侵略と述べましたが、この戦争のそもその発端が、中国が我が国の首相を、暗殺しようと企てたからだということを、忘れてはいけません。侵略を企てたのは、むしろ貴国ではないでしょうか？」

齋木の言葉を聞いた各国大使が、胡に疑念の目を向ける。

胡大使は慌てて弁解した。

「それは濡れ衣だ！ 少なくとも我が国の政府は、一切関与していない！ だいたい、暗殺事件が日本の自作自演ではないと、なぜ言い切れるのですか！？ 日本人はかつて、自作自演の鉄道爆破を口実に、我が国を侵略しました！ 自作自演の暗殺事件を口実にするとは、過去の侵略行為の再現だ！ 旧敵国条項の適用は必至です！」

だが齋木大使も、ここで引き下がる訳にはいかない。

「暗殺事件を、我が国の自作自演の可能性も否定できないと言うのなら、逆に中国政府が関与した可能性も、否定できません！ それに旧敵国条項などはすでに死文化し、一九九五年に削除を可決しています。諸々の事情で、未だに削除はされていませんが、いまさら差別的な同条項を適用するなど、国際連合の理念に反します」

ここで、齋木大使はとんでもないことを、口にする。

「中国は国際連合になんら貢献もなく、常任理事国でありながら、分担金の六五パーセントを滞納し、一方で莫大な費用を投じ軍拡を行っています。その上いままた、国際連合の理念に反する意見を述べました。このような国家に、国際連合に留まる資格があるのでし
ようか！？」

インドとベトナムの大使が、拍手をした。両国はすでに、昨日中国に宣戦布告をしている。

胡大使は反論する。

「いまは、極東での戦争に関する議論であり、そのようなことを論ずる場ではありません。だいたい、常任理事国の除名を求めるなど、なにを考えているのですか！？」

齋木大使はさらに言い返す。

「過剰な軍拡と侵略により世界平和を踏みにじる国は、常任理事国たる資格がないと言っているのです！」

「侵略と言いましたが、先に攻撃したのは日本でしょう！ 我が国は断じて侵略など、行っていない！！」

双方、一歩も譲らず、平行線をたどった。
この後も互いに批判を繰り返し、結局総会は中断してしまった。

第二九話 国際連合（後書き）

先日、なんとなくですが、私の小説の登場人物を姓名判断で調べてみました。

藤井首相と川村国防相はかなり悪い結果で、熊谷官房長官が最も良い結果でした。

微妙な心境です。

第三〇話 シデンコの野望と日米の不和（前書き）

さて、久しぶりのロシアです。

皆さんはシデンコを覚えていますか？

ロシア大統領の、セミョーン・M・シデンコですよ。
ちなみに私は、半ば忘れていました。

第三〇話 シデンコの野望と日米の不和

九月二六日 モスクワ

ロシア連邦大統領シデンコの支持率は、対日戦以来、低迷していた。損害は少ないとはいえ、実質的な敗戦である。任期を残しての退陣もあり得る。

再起の可能性として、内政面で成功するか、あるいは極東の動乱を利用するかであろう。

ロシアのアルセニー・N・ザスラフスキー首相は、大統領のシデンコの執務室にいた。昨日の国連総会のやり取りで、気になることがあったのだ。

「大統領、なぜ日中の停戦に反対するのですか？ 国内外では、今回の戦争で我が国が儲けているためだと、推測していますか？」

シデンコは国連大使に、日中の停戦を妨げるように、指示を出していた。

ザスラフスキーは、その真意を聞き出そうと考えていた。

「アルセニー・ニコラヴィチ、君はどう思っている？」

シデンコは逆に聞き返した。ザスラフスキーは、同じ大学の後輩でもあり、政界では弟子のような存在である。彼の見解を知りたいのだ。

「やはり、皆の言うように、武器および石油の輸出で、収益が上がっているからでしょうか？ ユジノサハリンスク空港復旧や民間人引き揚げの費用が、だいぶん嵩んでいますから」

「確かにそれもある。だが、それだけでは満点ではないな。」

ザスラフスキーはしばらく考えたが、答えは出なかった。

「やはり、分かりません。なぜ停戦を妨げるのか、教えてください」シデンコはようやく、ザスラフスキーの問いに、答えを告げた。

「我がロシアが世界を制するには、日中の戦いを利用することだ」

シデンコは、自らの戦略を述べ始めた。

「良いか、この日中の戦いは、世界に大きな影響を与えつつある。だが、これはまだ序の口だ。日中の戦いは周辺国を巻き込みつつ、大きくなっているな？ この戦いでは勝敗に関わらず、日中は疲弊するだろう。では、両国は復興のための資金を、どこから調達する？ ヒントはアメリカだ」

「アメリカ？ …… あっ、アメリカ国債ですか！？」

「そうだ。両国が、アメリカ国債を市場に放出すれば、アメリカ経済の信用は暴落する。これはリーマン・ショックの比ではない。アメリカ経済が大打撃を受ければ、繋がりが濃いEUも道連れだ。アメリカ、日本、中国、EUが共倒れすれば、国連など立ち行くまい。つまり、第三世界諸国も、自ずと潰れることになる。冷戦では、我が国はアメリカと繋がりを絶ち、経済的に立ち遅れたが、だが今回はそれが逆に、我が国に有利に働く訳だ。日中が戦争で疲弊した時こそ、ロシアが世界を制する時だ！」

ザラフスキーは納得した。

そして、他国の戦争を利用して、世界戦略を組み立てるシデンコに感服した。

同日 東京

同じ頃、首相官邸では、ホットラインを使い、藤井がクレイリーと話していた。

『藤井首相！ いい加減にしてくれ！』

クレイリーは電話越しに、叫んだ。

『さっさと戦争を止めてくれ！ 去年の八月に、あまり騒ぎを大きくするなと言ったはずだ！！』

だが、藤井にはまだ戦争を止める気はない。

「それは無理です。ここで中国と停戦すれば、あの国はまた戦力を回復してしまいます。私は中国の共産党政権が崩壊するまで、戦い続けます！」

藤井は宣言した。

『頼む！ 中国が潰ればアメリカは破滅する！』

「それでは、あなたは日本が中国に負けて良いと言うのですか！？
確かにいま手を引けば、一〇年は安泰かもしれません。しかし中国は以前にも増して反日教育に力を入れ、日本に圧力をかけてくるでしょう！ いまこの機を逃して、日本の不安を断ち切るチャンスはないのです！」

藤井はあくまで戦い続けるつもりである。いま中国を徹底的に叩かなければ、次はない。たとえアメリカ大統領の要望であろうと、停戦を受け入れる訳にはいかないのだ。

『それなら安全保障条約は破棄させてもらう！ あとで慌てて泣きついても、面倒は見られないぞ！』

クレイリーは言ったが、藤井は止めなかった。

「構いません。今回の戦争で、米軍が中国と戦わない時点で、日米安保など死文化しています。それに我が国が、米国依存症から脱却する、良い機会です。心配せずとも、極東の平和は日本が守ります」

藤井は電話を切った。

藤井は最初から、アメリカとは手を切るつもりだったのだ。乱発した国債で、他国に経済的に縛られた国など、頼りにできない。いずれ日米安保条約は解消し、在日米軍には丁重に撤退してもらうつもりだったのだ。それを、アメリカ側から言い出してくれたのだから、むしろありがたい。

藤井は別の受話器を取った。北朝鮮とのホットラインである。

「私です。そちらの準備はどうですか？」

白大將は藤井の質問に答える。

『滞りなく進んでいます。七四式戦車を貸与して頂きましたし、これなら中国軍とも互角に戦えますよ。我が第八特殊軍団の実力を、とくにご覧ください』

「心強いばかりです。インド、ベトナムも動き始めています。よろ

しく頼みます」

藤井は受話器を置くと、はるか西、中国の方角を見つめた。
大戦の戦局は、新たな局面を迎えようとしていた。

第三〇話 シデンコの野望と日米の不和（後書き）

シデンコがいろいろ考えている間に、日米は安保条約解消です。果たしてこの小説は、どこに向かうのか……。

すでにラストは決まっているのですが、そこに持っていくのが、なかなか大変です。

第三一話 史上最大の浸透作戦

一〇月一日 新儀州

深夜、中朝国境のこの街に、北朝鮮第八特殊軍団の主力部隊が、待機していた。彼らはこれから、越境して中国本土に進撃する。

中朝国境には、谷山などの自走砲や、日本から貸与された七四式戦車を始め、機甲部隊が集結しており、作戦開始と同時に陽攻に打って出る手筈となっている。

午前一時となった。作戦開始時刻である。

新儀州で待機していた部隊の頭上を、ミグ19が越えていく。遠方から砲声が轟き、しばらくして炸裂音が聞こえる。

第八特殊軍団は、前進を開始した。

中国軍も反撃するが、ミグ19の攻撃により、沈黙する。

しばらくすると、中国空軍の戦闘機が姿を現す。殲撃10型の編隊である。旧式のミグ19では敵う訳もなく、たちまち蹴散らされた。

だが、北朝鮮には、正確には対中大同盟には、隠し玉があった。

F-35と並ぶステルス戦闘機、心神である。

より高空で待機していた心神により、今度は殲撃10型が蹴散らされた。

地上では、各方面で北朝鮮の砲が、中国軍の陣地を砲撃していた。やがて、七四式戦車を先頭に押し立て、豆満江、鴨緑江を渡河し始める。

中国軍も応戦し、豆満江、鴨緑江の岸で激戦が展開された。

戦車戦については、北朝鮮の七四式戦車と中国軍の五九式戦車、八八式戦車はほぼ互角だった。

だがしばらくすると、北朝鮮軍は撤退を開始した。これらの部隊は、第八特殊軍団の浸透を援護するための、陽攻である。敵戦力の

誘致、拘束に成功したと判断し、岸で遅滞戦闘に移行したのだ。

その間に、第八特殊軍団の主力は、越境に成功した。

同日 北京

突如始まった北朝鮮軍の攻勢に、中国軍は対応のために魯を起こそうとした。

だが、北朝鮮軍は一時間足らずで撤退したため、魯が起床したのは、いつも通りの時間となった。

中国軍が北朝鮮軍の意図に気づいたのは、夜になってからだった。中朝国境付近の中国軍拠点で、同時多発的に破壊工作が行われ、一部の部隊が移動中に襲撃を受けたのだ。

慌てて調べ、北朝鮮軍の部隊が、国内に侵入したことが判明した。北朝鮮軍の攻勢は、その際の陽動だったのだ。

そして、さらにその事実が魯に伝わったのは、翌日、二日になってからだった。

魯は早速、軍首脳を召集した。

「国内に北朝鮮の部隊が、侵入したそうだな？」

魯の問いかけに、陳上將は戦々恐々としながら、現在分かっている情報を、開示した。

「はい、侵入した敵部隊は、第八特殊軍団と思われます。侵入経路ですが、主力が鴨緑江を浅瀬から渡河、一部は潜水艦及び工作船を使用し、遼東半島と山東半島に上陸したようです。すでに破壊工作を展開しており、被害が出ております。また、武装ですが、小日本の89式小銃や、9ミリ機関拳銃を使用していたという情報も入っており、昨日の攻勢で使用された、七四式戦車同様、小日本から貸与ないし輸入したものと思われます」

魯は唖った。第八特殊軍団が敵となると、容易ではない。第八特殊軍団と言えば、素手で一般兵士の一〇人や二〇人は殺せると言われている、人間兵器の集団なのだ。

「とにかく、瀋陽軍区と済南軍区は、第八特殊軍団の殲滅に、全力を上げる！」

魯は指示を出した。細かい戦術は、軍区に任せれば良い。

だが、翌日には事態がさらに悪化した。中国に浸透したのは、北朝鮮軍だけでは無かったのだ。

インド軍及びベトナム軍のゲリラが、密かにチベット自治区、雲南省、広西壮族自治区に浸透していたのだ。

そしてこの後、チベット自治区、新疆ウイグル自治区では、インド軍の浸透に呼応し、独立運動が展開され、中国軍を苦しめることとなる。

一〇月三日 佐世保

東洋最大と謳われる佐世保軍港から、日本海軍の艦隊が、出撃した。揚陸艦『大隅』『下北』『国東』の三隻を基幹とし、イージス艦『金剛』ヘリ空母『山城』を含む一五隻の大艦隊である。

この艦隊は今回の、三国で合計一六万人を動員した、大規模な浸透作戦の、仕上げを任務としていた。というよりむしろ、この艦隊のために、一六万人の浸透部隊が動員された、という方が正しい。

この、新たな第一強襲艦隊は、中国本土を目指していた。

第三二話 上海陸戦隊

一〇月八日 上海

日本軍、台湾軍の攻撃機が、上海の中国軍施設を、猛爆していた。爆撃で中国軍の抵抗が弱まると、六隻のL C A Cが海上を進んでいく。

搭載されているのは、兵員輸送用のコンテナである。

コンテナから歩兵が躍り出ると、瞬く間に橋頭堡を確保する。抵抗はない。

実は事前に台湾軍が、金門島奪回を目論み、福建省南部への上陸を計画しているという、偽情報を流していた。

中国軍は日本軍艦隊は、福建省上陸のための援軍と考え、戦力を移動させ始めていたのだ。事前に爆撃を受けたこともあり、上海はほとんど抵抗できない状態だった。

橋頭堡を確保すると、続いて一〇式戦車、九〇式戦車、九六式装輪装甲車などの重装備を揚陸していく。こうなると、上陸の阻止は困難だった。

中国軍は航空支援も受けられない。艦隊司令の早川中将は、『金剛』以下の艦隊を、長江口に突入させるという荒業で、中国空軍を退けた。

それでも中国軍は、市街地に籠もり、抵抗を画策した。

だがそれも、長くは続かないかに思えた。C I 2輸送機を使い、第一空挺団を、中国軍後方に送り込んだのだ。

しかし翌日には、転進中の中国軍の一部が引き返し、日中両軍の乱戦となってしまった。

しかも突然の上陸のため、民間人が多数残留しており、両軍は下手には動けなくなり、戦いは長引く可能性が高くなった。

戦いが長引けば、間違いなく中国軍に有利である。

中国軍は陸路を使えるため、援軍の派遣、補給が容易いのに対し、

海路、空路しかない日本軍は、いずれギリ貧になるのが、容易に予測できた。

一〇月一二日 東京

この時期、藤井は市ヶ谷の国防省に移っていた。

「そうか、戦闘は長引きそうか……」

藤井の言葉に、川村が答える。

「はい、申し訳ありません」

「まあ構わないだろう。造船所は押さえているのだ、あとは持久だな」

「はい、これで『江蘇』の戦力化は防げますし、次の攻勢のための陽動にもなります」

「それなら良い。しかし、民間人には、くれぐれも気をつけてくれ。来週には総選挙だ、不利になる要素は、なるべく減らしたい」

「分かっております。民間人の保護は徹底させます」

「あとは、シーレーンの確保だが……」

「そちらは『日向』以下の艦隊を派遣し、対処させています。石油については、ロシアからの輸入である程度は」

「分かった。国民が不安に思う要素は、なるべく無くしたい。よろしく頼む」

同日 北京

「上海に上陸した敵は、市街地にて釘付けとなっています。また、ゲリラの制圧も順調に進み、活動は下火となっており、殲滅は時間の問題かと。海軍の方ですが、潜水艦部隊は通商破壊を開始し、現在までに五隻のタンカー、貨物船を撃沈しました。また、モスボール状態にあった三隻の空母も、まもなく現役復帰が可能となります」

陳上將が、現在の状況を説明していた。それを聞く魯は、珍しく上機嫌だった。

しかし張はそれを、冷ややかに見つめていた。

（危ういな。陳上將は自軍に都合良い報告ばかりをしている。どの報告も間違いなくではないが、正確でもないぞ。小日本は通商破壊対策に、ヘリ空母二隻を派遣したではないか。ゲリラにしても、実際に損害を与えている訳ではない。来るべき攻勢に備え、物資を節約していると言うのが真相かもしれないな。空母も、三隻あるとはいえ、乗員と搭乗員の練度は、惨憺たるものと聞くぞ）
だが張は、この考えを口に出す気にはなれなかった。

同日 上海

つい最近まで、中国経済を支えていた摩天楼は、廃墟となりつつあった。

“森林、都市は兵をのむ”とは良くいったもので、日中両軍は大兵力を投入しながらも、小競り合いを繰り返していた。他に戦いようがないのだ。市街戦とは、小規模な独立的戦闘の繰り返しで、地歩を進めるしかない、厄介な戦いである。

一方で上海南部の平地では、松江方面から突破、包囲を目論む日本軍と、それを阻止する中国軍が激戦を繰り広げていた。

日本軍は予想に反し、戦力を充実させつつあった。

奪取した港湾施設、空港を活用し、二個師団を上海に送り込んでおり、機甲戦力も充実している。上海において一〇式戦車、九〇式戦車対九九式戦車、九六式戦車という戦車戦が惹起した。

だが、性能、練度では日本軍が若干優勢、量においては中国軍が若干優勢とあり、膠着状態となってしまった。

一〇月一三日の払暁、中国軍主力は日本軍を包囲すべく、松江方面にて攻勢に出た。

これに対し日本軍主力は、中国軍助攻正面に対し、逆に攻勢に出た。

これは愚挙である。もし先に、中国軍主力を拘束している日本軍部隊が撃破されれば、日本軍主力は包囲殲滅されかねない。危険な戦術である。

しかし、中国軍助攻もまた、輕挙妄動に打って出た。日本軍主力と、正面から戦闘に及んだのだ。本来この場合、中国軍助攻は、日本軍主力を拘束するべきであり、正面きつての戦いは、愚かである。結果、中国軍助攻は撃破され、中国軍主力は逆包囲の危険に晒されたため後退し、攻勢は頓挫した。戦いはまだ、続きそうだった。

第三二話 上海陸戦隊（後書き）

いよいよ中国本土に上陸です。

上海での戦闘となりました。

ちなみにタイトルの“上海陸戦隊”は、大日方傳主演のあれです。

この小説で戦ったのは、陸軍でしたが。

しかし、中国本土に上陸とは、危ないと思います。

下手をすれば広大な中国で、戦いは泥沼化して日本が疲弊してしまい、厭戦気分が高まり撤退などもあり得る訳で……。

怖いですね。

第三三話 第二次藤井内閣

一〇月一八日 東京

藤井は選挙速報を、食い入るように見つめていた。

この選挙で、敷島新党が過半数の議席を確保しなければ、政権を維持できない。他の政党は停戦を主張しているので、政権を失うことはすなわち、中国に止めを刺せないのだ。

藤井と敷島新党が目指すのは、あくまで単独過半数である。

開票は進んでいく。画面の中では、評論家が解説をしている。その解説は、当事者として見ると、正解もあれば間違いもある。

画面の隅では、グラフが伸びていく。見たところ、敷島新党は若干優勢である。

やがて各地で、開票が終わる。

今回の総選挙は、投票率がおよそ九二・一三パーセントと、異例の高さとなった。衆議院選挙の投票率の最高記録は、第一回の九三九パーセントであるから、それに迫る数字である。参政権を持つ人数からすれば、投票者数は過去最大だろう。

評論家は戦争という事態が、国家の指針を決める総選挙に、大きな関心を持たせたといった。

そうだろう。戦争となれば、命に関わる問題なのだ。関心を持たない方が、むしろ異常である。

官房長官の熊谷が、入室してきた。

「首相、選挙の結果はいかがですか？」

藤井は振り向くと、言った。

「我が党の勝ちだ」

「それでは」

「ああ、どうにか過半数は確保した。辛勝だったがな」

熊谷はテレビ画面を見た。議席数は野党の合計より、二議席多いだけである。

「たしかにきわどいところですね。」

「とにかく、これで27CVに続き、28CVも予算を確保できるな」

「ですが、戦時とはいえ、国防費が財政を圧迫しすぎると、いらぬ反発を買います」

「だが、台湾や北朝鮮は、日本製の武器も輸入してくれることになっている。この戦いで、中国の政権が崩壊すれば、そちらも有力な市場になるから、武器単価は下がる。最終的には国防費はマイナスになるはずだ」

「ならばよろしいのですが」

やはり、支持率の低下は不安要素だった。

同日 ワシントンD.C

アメリカの情報収集能力は卓越しており、クレイリーのもとに、日本の総選挙の結果が届いたのは、日本での報道の直後だった。

「あいつめ、まだ首相に居座るか」

クレイリーは敷島新党の勝利に、納得していない。なんとかして内閣を潰せないだろうか。

悩んでいると、財務長官のアレックス・L・マホニーが、執務室に入室してきた。

「日本はどうやら、藤井首相が続投するようですね」

「ああ、そのようだ。どうしたものかな」

「日本との関係回復は難しいですね」

「関係回復？ 誰がするものか。あいつのせいで、合衆国は破滅しかねないのだぞ！」

「大統領は、経済に弱いようですね。日本が勝てば、アメリカは破滅どころか、大儲けできますよ」

このマホニーの言葉に、クレイリーは質問した。

「どういうことだ？」

「日中が国債を放出すれば、たしかにアメリカドルは暴落します。」

ですがドル安になれば、我が国の輸出が伸びるのですから、低迷していた経済は、急成長できるのです。しかも戦争で疲弊した東アジアは、有力な市場になりますから、日中の戦争はむしろ歓迎するべきでしょう。それに国債の価値が暴落すること、考えようによっては、負債が減るということなのです」

目から鱗だった。

クレイリーは単純に、ドルが暴落することだけを考えていたが、よくよく考えてみれば、マホニーの言う通りなのだ。

「自国の経済ぐらい、把握してください」

「無理だから君がいるのだろう。喜べ、私のおかげで君は失業せずに済むぞ」

マホニーは苦笑するしか無かった。

一〇月二〇日 東京

第二次藤井内閣が発足した。閣僚は変わっていない。

中国は沈黙していたが、東南アジア諸国は違った。インドネシア、マレーシアが、対中大同盟への参加を打診してきたのだ。

味方が多いことは大歓迎である。早速同盟が締結され、両国の海軍は南シナ海で、中国潜水艦退治に従事し、陸軍、空軍はインド、ベトナムの援護に回ることとなった。

特にベトナムはゲリラ戦の他に、国境で戦闘が続いており、ハノイ近郊への爆撃もあるため、援軍が必要だった。

これに勢いづき、対中大同盟はさらなる攻勢に、打って出ようとしていた。

第三四話 海狼

一〇月二五日 南シナ海

日中は海上で、小競り合いを繰り返していた。主な戦場は、日本本土と上海を結ぶ、東シナ海の補給路と、東南アジアや中東と東アジアを結ぶ、シーレーンの周辺である。

ヘリ空母『日向』『伊勢』は、南シナ海にあった。

南シナ海は日台朝の生命線。潜水艦による通商破壊の阻止は、必要不可欠である。

日本海軍は『日向』型ヘリ空母二隻、五〇〇〇トン型駆逐艦二隻を中心に、二〇隻もの艦艇を南シナ海に派遣し、船舶護衛にあてた。シーレーンに万全を期すならば、マラッカ海峡から南下し、ジャワ海、マカッサル海峡、セレベス海を通り、太平洋に抜ける航路を採るべきだが、遠回りになる分、日数と燃料を余計に消費してしまう。民間商社からすれば、コストを考えると二の足を踏んでしまう。多くは南シナ海を通過する航路を通り続けた。

普通に考えれば、積み荷ごと船が沈むよりも、コストが増加するだけの方がマシなのだが、日本では民間で中国軍を侮る風潮があった。

つまり、対中大同盟に対して、中国軍が一度も勝っていないので、“中国軍恐れるに足らず”の雰囲気、知らず知らずのうちに、民間に広まりつつあったのだ。

結果として、日台の海軍は負担が増してしまった。

だがインド、ベトナム、さらにインドネシア、マレーシアの海軍からも援軍があり、戦力は充実した。特にインド海軍が、空母『ヴィクラント』を派遣してくれたのは、日台朝にとって、ありがたいことだった。

とはいえ、本音をいうならば、戦力はいくらあっても足りない。というのも、民間商社の船舶は、全くばらばらに行動しているの

だ。船団を組んでくれれば、まだ護衛もしやすいのだが、そのような訓練をしたことなど、もちろん皆無であり、政府の要請も、特に日本の船舶には行き届いていなかった。

すべての船舶に、十分な護衛をつけることはできず、護衛艦隊は南シナ海を遊弋して中国軍潜水艦を探しだすという、非効率的な戦術を採らざるをえず、通商破壊の被害をなくすことは、なかなかできなかった。

『日向』の艦載機が、敵潜を発見した。音紋は『明』級である。旧式艦であり、日本海軍の実力をもつてすれば、赤子の手をひねるようなものである。

『日向』が放った対潜魚雷は、瞬く間に『明』級を葬った。これで対中大同盟が撃沈した中国軍潜水艦は、一〇隻に上る。

だが中国海軍は、海南島の潜水艦基地が完成して以来、南海艦隊の潜水艦戦力の増強に取り組んでおり、まだ壊滅させるに至らずにいた。

また、水上艦艇と原子力潜水艦六隻は、不気味に息を潜めており、大同盟艦隊に不安を与えていた。

『日向』艦長、楨原隆一大佐は、状況終了を告げた。

そして、ため息を吐く。このところ、連続出撃でパイロットは消耗していた。

SH-60K一〇機、MCH-101一機と、海上自衛隊の頃より艦載機数は増えたものの、機体のローテーションは頭の痛い問題である。

「22DDHがあれば……」

ヘリ空母が三隻いれば、ローテーションも組みやすいだろう。

副長の土屋克実中佐が答えた。

「艦長、ないものねだりは無駄ですよ。だいたい、22DDHを諦める代わりに、『山城』と『瑞鶴』が調達できたのですから、22DDHまでとは、贅沢ですよ」

「まあ、そうかも知れないが、だか、『瑞鶴』は海の底、『山城』は上海に付きつきりではないか。代わりが欲しいぞ」

「自分にいわれても困ります。首相にでも直訴してください」

楨原は我慢するしかなかった。

一〇月三〇日 東京

井上は藤井に情報を渡した。

「“軍師”からの情報です。陳鐘臣上將は参謀総長を、解任されました。陳上將は降格のうえ、成都軍区司令員に任命されました」

“軍師”と呼ばれる人物の工作により、陳上將は事実上左遷された。

「それは助かる。彼がいなければ、今ごろ日本は焼け野原になっていたかもしれない」

“軍師”と呼ばれる人物が、中国軍を抑えなければ、サイバー攻撃や大規模な反攻作戦がありえた。

「“軍師”の差し金で、新たな空母打撃群の指揮官は、馬尽陶中將に決定したそうです。すでに戦意はないそうなので、活動は不活発なものになるかもしれません」

原子力空母『広東』に座乗し、『瑞鶴』と差し違えた提督である。

「そうか、戦意がない人物が指揮官ならば、あしらいやすい。“軍師”にはいずれ、お礼をしなくてはならないな」

藤井の言葉に、井上は質問した。

「そのことですが、“軍師”との密約は……」

「もちろん守るつもりだ。その方が我が国としても、都合が良い。

“軍師”にはよろしく伝えてくれ」

「分かりました」

アジア諸国に対する連敗。軍内部の内通者。

後世の人間はいう。中国はこの時点で、すでに崩壊を開始していた、と……。

第三四話 海狼（後書き）

久々の更新です。

主に潜水艦での通商破壊にスポットを当てましたが、少し物足りないですね。

本当はもっと、『日向』型と五〇〇〇トン型駆逐艦を、活躍させたかったのですが……。

現実問題として、海南島の潜水艦基地は、日本のシーレーン防衛を考える上で、非常に脅威度が高いですね。

いざという時、第一列島線の内側は通れなくなりますから。

さて、最後に“軍師”なる内通者に触れました。

お分かりかと思いますが、あの人です。

もう中国には負けていただくことは、お分かりですね、はい。盛大に負けていただきます。

第三五話 チベット戦線

二月二日 アルナーチャルプラディシュ

インド陸軍が、マクマホンラインを越え、チベット自治区に侵攻した。体裁は対中大同盟の連合軍だが、実質的にはインド陸軍といつて差し支えない。他国の投入戦力が、せいぜい一個戦闘団に過ぎないのに対し、インド陸軍は六個師団を投入していた。

空軍の支援のもと、T-90ブヒーシュマ、アージュンといった戦車を先頭に押したて、進撃した。

目標はラサ。そしてチベット解放である。

中国軍も反撃を行う。

標高四〇〇〇メートルのチベット高原で、激戦が展開された。

翌三日には、両軍はブラマプトラ川を挟み、砲撃戦を始めた。

インド陸軍はここで、カシミールからチベットの背後を突きたい。一二三万の陸軍には可能だったが、カシミールでの軍事行動は、パキスタンとの緊張を高めかねず、また、八〇〇〇メートル級の峰を持つカラコルム山脈を、越える気にはなれなかった。険しい接近経路は、利用価値が低い。

両軍の砲撃戦は続く。

インド陸軍にとって、ここでの膠着は許されない。

事態が動いたのは、午後になってからだ。一〇月に侵入させた浸透部隊が、攪乱を開始したのだ。

これにより、中国軍砲兵陣地は混乱し、インド軍歩兵はブラマプトラ川渡河を開始した。

中国軍は後方配備していた防御陣地が、攻撃を始めた。

さらに第一次橋頭堡に対し、機甲戦力を中心に逆襲を行い、インド軍歩兵を蹂躪した。インド軍の機甲戦力は、ブラマプトラ川を完全に渡河しておらず、有効な反撃できない。

だが、インド軍は砲兵が反撃に転じた中国軍に対し、砲撃を開始

し、撃退、予備兵力を投入することで、攻勢を再興した。
結果、犠牲を払いつつもインド軍は夕刻までに対岸に橋頭堡を完成させ、防御陣地を構築した。

一二月四日 ヤムドク湖周辺

インド軍攻勢の右翼部隊が、ブラマプトラ川を渡河、ニンチーを占領し、一路ラサを目指しているころ、左翼の部隊はブラマプトラ川に沿って西進、ヤムドク湖の周辺を制圧し、ラサは包囲されつつあった。

左翼の二個師団はネイトン、ギャンゼを占領、橋梁を確保するとラサに向け、北上を開始した。

成都軍区司令員、陳中將はすでに戦意を喪失していた。一応、ラサに集結しつつある部隊には、徹底抗戦を命じたが、その他の部隊には金沙川に沿い、防衛線を展開させた。

また、空軍にも戦力温存の名目で、出撃を控えさせた。
魯は陳中將に督戦をしたが、無視された。

一二月一〇日 ラサ

ついに、ラサに対して、インド軍の攻撃が始まった。

右翼部隊がメルド・グンカル県、左翼部隊がニエモ県及びチュシユル県になだれ込み、城関区、タクツエ県を挟撃した。

中国軍守備隊は堪えきれず、一二日、ルンドウプ県、トゥールン・デチエン県に退いた。

インド軍左翼部隊の一個師団は、ダムシェン県に侵入し、中国軍の退路を断つように動く。

中国軍二個歩兵連隊がこれを阻止し、ダムシェン県を南北に分ける形で、両軍が市街戦を始めた。

一方、中央から右翼にかけての部隊もルンドウプ県に進出し始め、こちらも激戦となりつつあった。

ラサの中国軍守備隊の主力、第一四九師団は、空軍に支援を要請したが、陳中將が、出撃をなるべく控えるように事前に指示しており、断られた。また、仮に出撃しても、第三三航空師団、第四四航空師団はともに旧式機主体であり、有効な反撃は難しい。

一四日には、ついにインド軍が、総攻撃に出た。

平地での野戦とは勝手が違うので、総攻撃といっても、戦局が急激に変化することはないが、数に勝るインド軍は確実に地歩を進め、ついにダムシェン県の防衛線を突破し、中国軍の背後に回り込んだ。三方からの圧力に、トゥールン・デチェン県は支えきれず、中国軍守備隊はルンドウプ県に、ついに包囲された。

徹底抗戦の命令を受けている以上、脱出は許されない。

しかし、弾薬は底をつき始め、包囲されている。
ならば……。

中国軍守備隊が降伏したのは、一六日のことだった。

一二月二〇日 チベット

対中大同盟はダライ・ラマ一四世を奉じ、ラサに入都した。
チベットは独立を宣言した。

対中大同盟の諸国は、直ちにチベットを承認した。チベットは対中大同盟に参加し、領内無害通過と駐留を、承諾した。

また、浸透部隊はこの時、すでに甘肅省、新疆ウイグル自治区に入り込み、扇動と、油田に対する破壊工作を展開した。

成都軍区の残存部隊は、追撃を逃れ、友軍の防衛線を目指した。

成都軍区は、金沙川に沿って防衛線を敷き、蘭州軍区もまた、崑崙山脈、唐古拉山脈に防衛線を構築し、さらなる攻勢に備えた。

同日 北京

魯は怒髪天を衝かんばかりに、怒り狂っていた。

「陳中將を処刑しろ！」

魯をなだめるのは、例によって張である。

「落ち着いてください。陳中將を処刑するのはともかく、我が国は、三方から包囲されつつあります。対策を練らなくては」

「分かっている！　だが、貴様は責任をとれるのか？　陳中將のよ
うなものを、成都軍区の司令員にした責任を」

陳中將を、成都軍区司令員に推したのは、張なのだ。

「もちろんです。私を政治委員として、成都軍区に送ってください。
前線で陣頭指揮をとります。それから、空母打撃群を出撃させ、ど
こでも構いません。とにかく敵地を攻撃させてください。このまま
我が国の敗北を、世界に印象づける訳にはいきません」

「分かった。準備ができ次第、向かってくれ。空母打撃群も出撃さ
せよう」

張は一例すると退室し、翌朝、北京を脱出した。

第三五話 チベット戦線（後書き）

チベットが独立しました。

東北、上海、チベットと圧力を受け中国は苦境に立たされています。ちなみに、作中ではインド軍が活躍していましたが、実は私はインド軍の実力は信用していません。

ただ、活躍してくれないと、このシナリオが成り立たないので……。

第三六話 Channel dash

一月二四日 大連

出撃準備を終えた中国軍空母打撃群は、ついに大連基地を出港した。

旗艦『施琅』には、馬尽陶中將が座乗していた。原子力空母『広東』を撃沈されたが、戦死した楊錦明大校に責任を取らせ、張のとりなしもあり、再び空母打撃群の指揮官に納まったのだ。

この空母打撃群は、通常型空母三隻と、北海艦隊で編成されている。

三隻を集中運用することで、より強力な打撃力を手に入れる。表向きは、三隻を分けられない理由を、このようにいうが、必ずしも真実ではない。

艦艇が足りないのだ。北海艦隊は今までの小競り合いで、少ない損害を受け、また、北京の守りもおろそかにできず、打撃群を三個に分ける余裕がなかったのだ。

軍備を拡張し、艦艇の数は日本海軍に一〇倍に届くが、しかしトン数で見ると、渡洋性に劣る小型艦が中心と分かる。沿岸海軍からの脱却はまだ、できていないのだ。

空母に付き添う護衛も、十分な数を用意するのは、難しい。

だが、上層部のいうとおり、三隻の空母を集中運用するのは、打撃力を高める手段として、確かに有効である。『施琅』の固定翼機搭載数は、四八機。『広東』級の七二機と比べ、三分の二である。

『施琅』を参考にした他の二隻、『杜爽』『劉澄』も同様で、三隻の艦上機の合計は、一四四機、ヘリコプターを加え、一八〇機である。

馬は攻撃目標の選定も、任されていた。

戦略的価値が高く、宣伝効果も見込める拠点が、最も好ましい。例えば、東京である。

もちろん、現状で東京を攻撃するのは不可能だが、戦略目標は何も、東京だけではない。

だが、どちらにしろ馬には、敵を攻撃する気はない。出撃にあたり、張から密命を受けていた。馬はそれを実行するべく、命令を下した。

「我が艦隊は東シナ海を南下し、台湾海峡を突破する！」

一月二六日 台湾海峡

馬が指揮する空母打撃群が、台湾海峡に姿を現したのは、正午過ぎだった。

海峡突入と同時に、三ノットに加速し、突破を図った。

三ノットとはいえ、最短でも八時間ほどかかる。その間、艦隊は敵前に身を晒すことになる。

当然、敵の来襲が予測される。馬は艦隊上空に、限定的な航空優勢を確保するべく、直掩機を準備させた。

当初、この海域を担当していた日本も台湾も、空母打撃群は、寧波に向かうものと考えていた。一部を除いては。

寧波にて東海艦隊と合流し、台湾もしくは沖繩を攻撃、あるいは、佐世保と上海を結ぶ、シーレーンを攻撃する公算もある。

実際、打撃群は黄海を抜け、杭州湾を目指す航路を採っていた。だが、打撃群は杭州湾には入らなかった。

台湾海峡を目指し、南下を続けたのだ。

『蒼龍』型潜水艦の三番艦『白龍』は、台湾海峡において、空母打撃群を捕捉した。

だが、攻撃はしない。国防省から攻撃を厳禁する命令が、事前に届いていたのだ。

目の前に、旧海軍の『伊19』に匹敵する快拳を上げるチャンスがありながら、『白龍』は見逃した。

『白龍』の水中速力は二〇ノット。打撃群の艦隊速力は三一ノット。しばらく追跡したが、とうとう魚雷の射程圏外に、逃げられてしまった。

「これ以上は蓄電池の電力がもつたいない。ここまでだな」

『白龍』の艦内で、艦長の山木慎吾大佐は、追跡中止を命じた。

「逃げられましたね」

副長の隆野圭介中佐が、寂しそうにいった。

「ああ、逃げられたな」

山木も、同じく寂しそうに応えた。

「いったい、何なのでしょう。目の前に明らかな脅威がいるのに、攻撃するなどは」

「さあな、海の底にいるんじゃないか、外のことは分からないからな」

敵潜発見の報告に、馬は悩んだ。海峡突破を優先し、無視するか、撃沈するべきか。

通常なら、危険を絶つために撃沈するべきだが、しかし馬は、あえて無視した。

艦隊の速力は三一ノット。対中大同盟の潜水艦は、インドの『アリハント』級が、三四ノットを発揮できるのみで、他はせいぜい二ノット程度なのだ。

ソーナーでは、減速ギアの騒音は確認できなかった。『アリハント』級はターボ・エレクトリック式ではないから、減速ギアの音がするはずである。敵潜は原潜ではない。

つまり、たやすく振り切れるはず。

この推測は間違いではなく、敵潜は引き離され、やがて追跡を諦めた。

だが、まだ安心はできなかった。ここはまだ台湾海峡。制海権も航空優勢も、敵の手中にある。

ついに、敵機が来襲した。数は二四機。

馬は邀撃機の発進を命じた。パイロットの練度は心許ないが、こ

ここで空母を失う訳にはいかない。

だが。

敵編隊は、唐突に変針した。一弾も放つことなく、引き返していく。

いったい、なんだったのか。

艦隊は、敵に確実に捕捉されながら、攻撃は受けなかった。

馬が、敵の不可解な行動の真相を知ったのは、翌日、海南島に到着してからだった。

第三七話 中華崩壊

二月二七日 上海

突如、戦火が止んだ。

半ば廃墟と化した上海は、静寂に包まれていた。

中国軍側から、停戦の呼びかけがあったのだ。

同時に、日本本国からも、上海に展開する部隊に、停戦命令が舞い込んだ。

日中の将兵は当事者でありながら、全く事態が飲み込めなかった。そして、彼らの知らないところで、事態は進行していた。

同日 北京

上海での停戦に、中南海は全く関与していなかった。全て南京軍区、さらに広州軍区が、勝手に発したものだっただ。

そして事態の把握を進めていくと、停戦命令が張によって出されたことが、判明した。

魯はすぐに、受話器を手にした。党の幹部は全員、携帯電話を所持している。

「張！ いまどこにいる！？」

『南京ですが、それがなにか？』

「南京！ どうして南京にいるのだ！？ 貴様は成都に向かったはずではないか！ この停戦命令は何だ！？」

『停戦命令は停戦命令です。私の提案により、南京、広州両軍区は独立を決定しました。南京軍区の徐中将与広州軍区の王中將も、賛同しています。独立宣言は三日ですので、よろしくお願いします。なんなら、独立記念式典の招待状を出しますが？』

返事をする前に、張は電話をきった。

同日 南京

人民解放軍と武装警察に制圧された政庁で、張は携帯電話を切った。

後ろにいた二人の男が、近づいた。

「この度のご英断、ありがとうございます、“張主席”。お陰様で、我々は負けずに済みそうです」

一人がいった。

二人は、日台の連絡と調整を行っていた、諜報員である。開戦前にはビジネスマンに扮し、何度も日台を行き来していた。

「車の中で日本側から、内通者の話を聞いた時は、驚きました」
もう一人がいう。

「本当は開戦の時点では、まだどっちつかずだったがね。対中大同盟結成でようやく決心がついたよ」

開戦の気配を察知した張は、日本に内通を打診していたが、あくまで保険であり、また、周囲に気取られないためにも、明確な態度は示さなかった。この独立を決意したのは、対中大同盟の結成の後だった。

「祖国が生きのびることができないなら、新たに造るというのも一興だろう。それより、しっかりと支援はしてくれるのだろうか？」

張にとって気になるのは、そこである。対中大同盟の支援という勝算があるからこそ、独立という行動にでたのだ。

「もちろんです。藤井首相は嘘をつかない方です」

この答えに、張は苦笑した。手元の情報が正しければ、この戦争の直接の引き金は、藤井首相の“嘘”らしい。この諜報員は、それを知っているのだろうか？

同日 海南島

海南島は、観艦式の様相を呈していた。中国軍だけではない。インド軍の空母や日本軍のヘリ空母、インドネシアやベトナム、マレーシアの駆逐艦やフリゲートもいる。

それらの大艦隊が、海南島基地に所狭しと停泊していた。

その様子を、『施琅』の艦橋から、馬が眺めていた。
なぜ敵国の艦がいるのか。

入港時、まさか海南島が占領されたのではないかとも思ったが、
そのような情報はなかった。

馬の疑問の答えは、停戦命令だった。

南京、広州軍区は独断で停戦し、対中大同盟を引き入れたそうだが、
独立するという話もある。

現在の空母打撃群は、拿捕されたような状態にある。正確には拿
捕ではないが、港外にすることはできない。

独立となれば、北京の政府と戦うことになる。その際、空母打撃
群は大きな戦力となるので、手放すことはできないのだろ。張が、
海南島に向かうように指示を出したのは、このためなのだと分かる。
これからどうなるのか。事態は混沌としていた。

平成二八年一月二日 東京

中国分裂は、思いのほか順調に進んだ。

「大変なのはむしろ、これからだな」

中国の崩壊が、アジアどころか、世界中を混乱させることは必至
である。

今後の国際関係を見越した上での、戦後処理が求められる。

この事態にどう対応するのか、現在、首相官邸において、会見の
準備が進められていた。

藤井は川村と戦後処理について、話していた。

「張主席は、『江蘇』を譲ってくれるそうです」

「原子力空母を？ 気前が良いな」

「すでに通常型が三隻ありますし、原子力空母は維持も大変ですか
ら、厄介払いかもしれません」

「なるほど。しかし、お陰で28CVの予算は、必要なくなるな」

「しかし、仕上げや改装のための費用は必要です」

「だが戦いが終われば、新造のための予算の成立は難しいからな。」

渡りに船ともいえるか」

「ところで北京政府との停戦ですが……」

「すでに、韓国を仲介に、予備交渉を準備している。来週中には、まとまるだろう。会見が終わったら、国防省の意見も聞くから、待っていてくれ」

その時、執務室の扉がノックされた。藤井の秘書である。

「首相、会見の準備が整いました」

「分かった。すぐにいく」

返事をする、藤井は立ち上がった。戦争終結に向けた意志を示すために。

第三七話 中華崩壊（後書き）

一応、これが最終話ですが、まだエピソードが残っています。

三七話で終わりというのは、だいぶ短いですね。

本当は五〇話程度を考えていたのですが……、何か足りないと考えに考えて、「そういえば韓国が参戦していない！」と気づき、愕然としてしまいました。

単純なミスです。

すみません。

もちろん「まあ、停戦の仲介に使えたから、ちょうど良かったかな？」などと考えていませんよ。

エピソードの投稿は今月の二七日の予定ですので、今しばらくお待ちください。

エピローグ

二〇一五年、平成二七年に東アジアを包んだ戦火は世界は混乱に陥れた。

中国は、自国内で弾道弾が飛び交う泥沼の内戦に突入し、ロシアは混乱に乗り、中国に代わり第三世界諸国に経済支援を行い、影響力を強めていた。

アメリカはドルが暴落したが、結果的に、ドル安による輸出好調で景気が回復し、パクス・アメリカナの再現を目指し、動き始めている。

北朝鮮は、民主化と、資本主義経済の導入による混乱を抜け出せず、朝鮮半島の統一は未だに果たせずにいた。

日本は経済が疲弊し、景気の低迷が続いていた。中国という脅威がなくなった以上、国防費の削減と軍縮は、必至だろう。

この戦いの発端はどこか。

寧波奇襲、あるいは敷島新党の政権獲得などという声もあるが、日本の再軍備を象徴する、択捉戦役に求める声も根強い。大戦の一つの局面であるから、択捉戦争ではなく、択捉戦役なのだ。

日本を疲弊させ、世界を混乱させたこの戦いは、果たして正しかったのか。

答えはまだ分からない。

分かっていることは、世界の秩序が大きく変わる、歴史の転換点となったことだけである。

各国は新たな世界秩序を構築するべく、動き始めている。日本、アメリカ、ロシア、EU、多くの新興国……。世界経済の覇権を握るべく、水面下で胎動しているのだ。

構図と手段を変えた新たな戦いの訪れは、そう遠くないのかもしれない……。

エピローグ（後書き）

完結しました。

独りよがりです。完結をわざわざ海軍記念日に合わせるとは、いったいどういふつもりなのか……。

前回書いたように、短い気がします。

おまけに書いた本人が改めて読み直すと、矛盾点やらおかしい箇所やらがあります……。

客観的に見てこの程度かと思ったりします。

おかしい箇所の言い訳ですが、実をいうと、もともとこの作品を書き始めた時点で、細かい設定や考えは無かったのです。

ある晩、日本がアジアの国々と一緒に中国を袋叩きにする夢を見まして、そこに若干の知識と知恵、そして大いなる妄想と願望を加えた産物なのです。

七割五分ほど思いつきで書いていました。

ある意味、完結してしまったこと自体が、すごいです。

最後に、拙い作品でしたがここまでつき合ってください、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4751i/>

大東亜日中大戦

2011年10月2日03時27分発行